第２回 つなぐ人フォーラム

実施報告書

～自然・文化・地域・人をつなぐ～

2009 年 12 月

第２回 つなぐ人フォーラム 実行委員会
財団法人 キープ協会

目次

実行委員長 あいさつ 3

実施概要 4

３日間の流れ 5

つなぐ人フォーラム実施報告 8
- アジアに広がる「つなぐ人」のネットワーク 9
- アジアの事例紹介 10
- ワークショップ報告 20
- プレゼンテーション／ワークショップなど タイトル一覧 40

参加者の情報 41

実行委員からのメッセージ 42

第３回 つなぐ人フォーラムに向けて 43

第２回 つなぐ人フォーラム 実行委員と運営スタッフ 44

Table of Contents

Message from the Chairman 3

Implementation Outline 4

Tsunagu-Hito Forum Schedule 5

Report: The 2nd *Tsunagu-Hito* Forum 8
- Growing *Tsunagu-Hito* Network in Asia 9
- Guest presentation from Asia 10
- Workshop Report 20
- Presentations and Workshops (Titles and Speakers) 40

General Information of Participants 41

Message from the Executive Committee Member 42

Proceeding to the 3rd *Tsunagu-Hito* Forum in 2010 43

The 2nd *Tsunagu-Hito* Forum Executive Committee Members and Administration Staff 44

第２回 つなぐ人フォーラムを開催して

つなぐ人フォーラム実行委員会
実行委員長　　小林 毅

私は、インタープリテーションを通して、自然と人をつなぐ活動を実践してきました。近年になって、博物館や動物園、地域おこしなど様々な分野でインタープリテーションが行われるようになっています。この人たちが一同に会したら、お互いの活動にもっと深みや可能性が生まれるのではないか、と川嶋さん（つなぐ人フォーラム事務局長）と意見が一致し、「やろう！」ということになったのです。 実際に、フォーラムの開催に先立ち、様々な分野の方々にお声かけして準備ミーティングを始めた段階から、私たちが想像していた以上に面白い化学反応が起きだしていました。

実は、つなぐ人フォーラムの開催には上記以前の話がありました。川嶋さんとの雑談のテーマ？は、自然と人をつなぐインタープリテーションを実践してきた私たちの次なる仕事は何だろう？ということでした。若い人たちが現場で活躍するようになってきた今、私たちができることは、と考えた時、アジアのインタープリテーションに貢献することではないかな？というアイデアが浮かんできたのです。アジアのインタープリテーション・フォーラムを実行するとして、現段階でもアジアのインタープリテーションの現場に参考になるような情報はある程度蓄積されているだろうけれど、日本では新たなステップを踏み出している、という部分も創りたいね、という話になりました。このことも、つなぐ人フォーラムを呼びかけることの一要因となっています。

今回は、上記の両方を合体させる形で実施してみました。アジアから環境教育の世界で活躍されているゲストをお招きして、ゲスト同士ならびに日本のつなぐ人との交流を行いました（これがアジア・インタープリテーション・フォーラム的な部分）。そして、第２回つなぐ人フォーラムとしては、自然解説・博物館・科学館・美術館・企業・メディアなど、前回以上に幅広い領域から「つなぐ」活動をしている方々に集まっていただき、交流を行いました。参加者の皆さん、ゲストの皆さん、実行委員、スタッフ含め 126 名で作り上げた第２回つなぐ人フォーラムは、それぞれの現場での経験や技術の分かち合いや、分野を超えた交流がなされ、それぞれの「ニューロン」間に新しい「つなぐ」シナプスが生まれた、と感じることができる、今までにない３日間となりました。

私自身は、日本のつなぐ人同士の交流が、アジアの皆さんにとっても、新しい動きとして感じていただけたのではないか、と思っています。ただ、両方のフォーラムを一度に開催することへの課題は残ったかな、とも思いました（言語やテーマの問題など）。

以上の思いから始まり、２回開催してきたつなぐ人フォーラムですが、今後も、日本の「つなぐ人」の試みがアジアのインタープリテーションにつながっていったらいいな、と思っています。（「つなぐ人＝*Tsunagu-Hito*」という用語をアジアへ広めようという目論見も進めつつあります！？）

開催にあたっては、国際交流基金より助成をいただいたほか、多くの企業等のみなさまをはじめ、多くの方々よりご協力をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

実施概要

「インタープリテーション」はメッセージと人をつなぐ技術です。今や「インタープリテーション」は野外での自然解説の分野で使われるだけではなく、動物園・博物館・科学館・美術館などの展示解説やエコツアーガイドなどの場で盛んに行われるようになってきました。こうした領域を超えて「インタープリテーション」（伝える技術）の役割を確認し、様々な現場の経験や技術を分かち合うことによって、「つなぐ技術」や「学びの場づくりの知恵」を高めあうことをねらいとして、昨年に引き続き「第２回つなぐ人フォーラム」を開催いたしました。今年は、国際交流基金の助成を受け、韓国、中国、台湾、インドネシア、マレーシアなどアジア各国からの「つなぐ人」にも参加いただき、各国の最新情報を交換するとともに、アジアにおける「つなぐ人」のネットワーク作りに向けて、はじめの一歩を踏み出すことができました。

■名称：第２回「つなぐ人フォーラム～自然・文化・地域・人をつなぐ～」

■期日：２００９年９月６日（日）～８日（火）

■場所：財団法人キープ協会清泉寮

■参加対象者：自然の中でのインタープリテーション、環境関連施設での室内解説活動、動物園・博物館・美術館・科学館などの室内・野外解説活動、エコツアーでのガイド、各種メディアを使った伝える活動地域活性化の活動食べものや作り手と消費者をつなぐ活動」などに関わる人＝つなぐ人

■ねらい：領域を超えて、つなぐ仕事をしている人々が集うフォーラムを開催する。自然（公園）の中で、動物園・博物館・科学館・美術館などの展示の前で、エコツアーなどの機会に、そして様々なメディアを通して行われている、「インタープリテーション」（伝える技術）の役割を確認し、様々な現場の経験や技術を分かち合うことによって、「つなぐ技術」や「学びの場づくりの知恵」を高めあうことを目的とする。

■主催：第２回「つなぐ人フォーラム」実行委員会／財団法人キープ協会

■共催：日本インタープリテーション協会／立教大学ＥＳＤ研究センター

■助成：国際交流基金

■後援：社団法人日本環境教育フォーラム／ＮＰＯ法人自然体験活動推進協議会／ＮＰＯ法人日本エコツーリズムセンター／日本展示学会／株式会社オルタナ／日本ミュージアム・マネージメント学会／日本エコミュージアム研究会／社団法人日本動物園水族館協会（順不同）

■協力：エヌ・ティ・ティ　レゾナント株式会社／サントリービジネスエキスパート株式会社／電源開発株式会社（Ｊ－ＰＯＷＥＲ）／株式会社日能研／東京電力株式会社／浄土宗大遠忌事務局／三井不動産レジデンシャル株式会社／株式会社読売広告社／有限会社プラス・サーキュレーション・ジャパン／株式会社４ＣＹＣＬＥ　（順不同）

■開催事務局：財団法人キープ協会　Tel. 0551-48-3795
〒407-0301　山梨県北杜市高根町清里 3545

■関連行事：つなぐ人シンポジウム
2009 年９月５日（土）15 時～18 時
立教大学池袋キャンパスにて開催

■Title: The 2nd *Tsunagu-Hito* Forum: Connecting Nature, Culture, Local Communities and People

■Date: September 6 (Sun) – September 8 (Tue), 2009

■Venue: Seisenryo, Kiyosato Educational Experiment Project, Inc. (KEEP)

■Target participants: *Tsunagu-Hito*
** *Tsunagu-Hito* literally means “a person who makes connections.” *Tsunagu-Hito* includes a wide variety of people such as interpreters (of natural and cultural heritage resources), educators for environmental education, eco-tour guides, people who work at public facilities (museums, nature centers, aquariums, botanical gardens, and children's museums), local community coordinators, food and agriculture educators, publicity agents, and people in charge of CSR programs.

■Objectives: *Tsunagu-Hito* Forum aims to enhance interpretive techniques for making connections and share wisdom for creating learning opportunities through identifying the role of interpretation and sharing on-site experiences and techniques over spheres.

■Organizer: The 2nd *Tsunagu-Hito* Forum Executive Committee, KEEP

■Co-organizer: Association for Interpretation Japan, Rikkyo University ESD Research Center

■Grant by: The Japan Foundation

■Secretariat: KEEP (TEL:0551-48-3795, Address:3545 Kiyosato, Takane-cho, Hokuto City, Yamanashi, 407-0301 Japan）

■Related event: *Tsunagu-Hito* Symposium: Aiming for Asian Interpreters Network
September 5, Saturday, 2009
Rikkyo University Ikebukuro Campus

３日間の流れ

第１日目　2009 年９月６日（日）　<Day 1> September 6 (Sun), 2009

開会式／お互いを知り合う時間／アジアの事例紹介／日本の事情／10 分間プレゼンテーション

Opening Ceremony, Orientation & Introduction to *Tsunagu-Hito* Forum, Present Condition in Japan, Asian Guest Presentation, 10 minutes Presentation Part 1

12：00～　受付開始
13：00～　開会式
13：20～　全体会①　お互いを知り合う時間
14：15～　全体会②　アジアの事例紹介
15：30～　全体会③　アジアの事例紹介
16：40～　全体会④　日本の事情
19：30～　10 分間プレゼンテーション

12:00 Registration
13:00 Opening Ceremony
13:20 General Meeting1 “Orientation & Introduction to *Tsunagu-Hito* Forum” & “Present Condition in Japan”
14:15 General Meeting2 “AsianGuest Presentation Part1”
15:30 General Meeting3 “AsianGuest Presentation Part2”
19:30 “10 minutes Presentation Part1”

■お互いを知り合う時間／日本の事情

どんな分野の方がいるのか、日本でのインタープリテーションの事情などを話しました。

参加された方は、博物館から動物園、自然系インタープリテーションをされている方など様々でした。

■アジアの事例紹介

アジアからのゲストによる、それぞれの施設・現場の活動紹介がありました。

■10 分プレゼンテーション

参加者の皆さんから、事前に紹介したい事例などを募集してプレゼンテーションを行いました。

＜テーマと発表者＞（以下、敬称略）

・記憶とモノ～語られること、それをつなぐこと:ベガ委員会の活動から～　発表者:重盛　恭一
・見える・つながる・環境情報～ポータルサイトの取組み　発表者：杉盛　啓明
・ラジオと星で人をつなぐ～山梨産ほしひかりの試み　発表者：跡部　浩一
・自然体験普及のために、一民間企業ができることは、果たしてあるのか教えて頂けないでしょうか？　発表者：大島　伸一
・森の危険な生き物　発表者:原田　けいこ
・みんぱくミュージアムパートナーズ（MMP）の活動　発表者：五月女　賢司
・インタープリテーションにおける「へぇ～」と「ほぉ～」について　発表者:田中　広樹
・体験交流員のお仕事紹介　発表者:島　絵里子
・自然と人をつなぐ　丹沢の自然再生　発表者：吉田　直哉
・新潟市水族館での「つなぐ」こころみ　発表者：大和　淳
・安い素材で格好よく見せるハンズオン展示　発表者：奇二　正彦

■“Orientation & Introduction to *Tsunagu-Hito* Forum” & “Present condition in Japan”

Introduction to *Tsunagu-Hito* Forum explained why and who planned this forum.　Then executive committee members talked about the present condition of interpretation and other related issues in Japan.

■“Asian Guest Presentation

Guest speakers from Asia gave their presentations regarding introduction of their organizations and/or facilities, their present condition of interpretive activities, and so forth.

■“10 minutes Presentation Part 1”

Presentations from participants were held as follows:

・Memory and Objects: To be Talked and Connect (from activities of Vega committee)
Speaker: Kyoichi SHIGEMORI
・Visible, Connectable, Environmental Information: Trial of a Portal Site
Speaker: Hiroaki SUGIMORI
・Connecting people by Radio and Stars: Trial of Yamanashi’s Hoshihikari
Speaker: Koichi ATOBE
・For Popularization of Nature Experience: Could you tell me what private corporations can offer?
Speaker: Shinichi OSHI
・Dangerous Living Creatures in the Forests
Speaker: Keiko HARADA
・Introduction of Activities of “Minpaku Museum Partners ”
Speaker: Kenji SAOTOME
・”Heh!” and “Hoh!” in Interpretation
Speaker: Hiroki TANAKA
・Introduction of Works of “Taiken-Koryu-In”
Speaker: Eriko SHIMA
・Connecting Nature and People: Nature Restoration in Tanzawa”
Speaker: Naoya YOSHIDA
・Trial of “Connecting” at Aquarium
Speaker: Atsushi YAMATO
・Stylish Hands-on Exhibits by Using Economical Material
Speaker: Masahiko KIJI

第２日目　2009 年９月７日（月）

<Day 2> September 7 (Mon), 2009

ワークショップ／10 分プレゼンテーション

Workshops, 10 minutes Presentation Part 2

09：15～　全体会⑤
　ワークショップの説明と参加者募集
　この指とまれミーティングについての説明
10：30～　ワークショップ　その１
14：30～　ワークショップ　その２
18：00～　全体会⑥
　全体のふりかえりの時間
　３日目に実施する「この指とまれミーティング」の実施者募集
20：00～　10 分間プレゼンテーション

09:15　General Meeting 5 “Introduction to workshops and sign-up” & “Introduction to Konoyubi Tomare Meeting”
10:30　Workshops Part 1
14:30　Workshops Part 2
18:00　General Meeting 6 “Sharing Session” & “Sign-up for Konoyubi Tomare Meeting”
20:00　10 minutes Presentation

■ワークショップ

午前５つ、午後５つのワークショップ（以下、ＷＳ）が実施されました。

様々な観点から、「つなぐ」を考えるＷＳ。各ＷＳの報告は、Ｐ．20～39 に掲載しています。

＜テーマと実施者＞（以下、敬称略）

１．命をつなぐ～命をインタープリテーションする～
　　実施者：小林　毅、古賀　直子
２．「モノ」から紡ぎ出す“モノがたり”
　～モノから記憶をつなぐ～
　　実施者：高橋　真理子、古瀬　浩史、重盛　恭一
３．庭先飼育を全国に
　　実施者：広瀬　敏通
４．テレビ局は地域のインタープリター～長崎編～
　　実施者：川廷　昌弘、増田　朋和
５．イノバティブ・コミュニティってなんだろう？
　～持続性と革新性を「つなぐ人」の役割を考える～
　　実施者：嵯峨　創平、平田　裕之
６．地域と人をつなぐ、人と人をつなぐ～旅のチカラ～
　　実施者：中垣　真紀子
７．対話から学ぶ～ステークホルダー・エンゲージメント・ワークショップを体験しよう～
　　実施者：中西　紹一、川嶋　直
８．安全管理から危機管理へと意識を広げる
　　実施者：佐藤　初雄、町頭　隆児
９．テレビ局は地域のインタープリター～山梨編～
　　実施者：川廷　昌弘、萩野　弘樹
10．デザイン教育は参考になるか？
　　実施者：西村　佳哲

■10 分プレゼンテーション

＜テーマと発表者＞（以下、敬称略）

・忘れられた図書館　発表者：丸山　高弘
・ＣＳＲワークショップで社員をつなぐ仕掛け
　発表者：川路　武
・葛西臨海公園における環境教育プログラム
　発表者：宮嶋　隆行
・Ｊ－ＰＯＷＥＲの取り組み～エコ×エネプロジェクト～
　発表者：藤木　勇光
・ＮＴＴ東日本の社員意識向上に向けた取り組みについて
　発表者：渡辺　裕信

■Workshop Part 1 & Part 2

There were 5 workshops in the morning and 5 workshops in the afternoon which focused on “*Tsunagu* (connecting)” from various perspectives.　Reports of the workshops are shown on P.20～39.

※＝Organizer & Facilitator

1. Connect Lives: Interpret about “Life”
   ※ Takeshi KOBAYASHI, Naoko KOGA
2. Spin “MONOgatari (Tales)” from MONO (Objects)
   ※ Mariko TAKAHASHI, Koji FURUSE, Kyoichi SHIGEMORI
3. Let’s Spread “Raising in the Garden” to the Whole Country
   ※ Toshimichi HIROSE
4. TV Station is Local Community’s Interpreter: Case of Nagasaki
   ※ Masahiro KAWATEI, Tomokazu MASUDA
5. What’s Innovative Community?: Think *Tsunagu-Hito’s* role of Connecting Sustainability and Innovation
   ※ Sohei SAGA, Hiroyuki HIRATA
6. Connect Community and People, Connect Person to Person: Power of Journey
   ※ Makiko NAKAGAKI
7. Learn from Dialogue: Stakeholder Engagement
   ※ Shoichi NAKANISHI, Tadashi KAWASHIMA
8. Spread Consciousness from Safety Management into Crisis Management
   ※ Hatsuo SATO, Ryuji MACHIGASHIRA
9. TV Station is Local Community’s Interpreter: Case of Yamanashi
   ※ Masahiro KAWATEI, Hiroki HAGINO
10. Can Design Education Apply to Interpretation and *Tsunagu-Hito* Activities?
   ※ Yoshiaki NISHIMURA

■10 minutes Presentation

・Forgotten Library
　Speaker: Takahiro MARUYAMA
・Trick to Connect Employees through CSR Workshop
　Speaker: Takeshi KAWAJI
・Environmental Education Program in Kasai Rinkai Park
　Speaker: Takayuki MIYAJIMA
・J-POWER’s Eco-Ene (Ecology and Energy) Project
　Speaker: Yuko FUJIKI
・Trial to Enhance Employee’s Awareness: NTT East Corp.
　Speaker: Hironobu Watanabe

第３日目　2009 年９月８日（火）

<Day 3> September 8 (Tue), 2009

この指とまれ！ミーティング／３日間のふりかえり／立食交流会

"Konoyubi Tomare" Meeting, Reflection and Sharing Session, Farewell Lunch

09：00～　この指とまれミーティング
11：45～　全体会⑦
「この指とまれ！ミーティング」の成果を分かち合う＆３日間のふりかえり
12：30～　立食交流会
13：30～　終了

09:00　"Konoyubi Tomare" Meeting
11:45　General Meeting 7 "Report from Konoyubi Tomare Meeting" & "Reflection & Sharing Session"
12:30　Farewell Lunch
13:30　End of the Forums

■この指とまれ！ミーティング

前日のワークショップの続きや課題などを参加者の皆さんから出していただき、「この指とまれ！」方式の具体的な話し合いが持たれました。

ソフトクリームを食べながら、話し合いをするチームもありました！

＜テーマと実施者＞（以下、敬称略）

・第３回つなぐ人フォーラムを考えよう！
実施者：木村　航
・つなぐ勇気
実施者：猪俣　寛
・"演劇でつなぐ"が知りたい！
実施者：河西　あゆみ
・日本、地域のよさを探してみませんか？
実施者：松浦　亜紀
・自然とくらしをつなぐ～パーマカルチャー～
実施者：梅崎　靖志
・つなぐ仕事で月 100 万円稼ぐ方法を考えよう
実施者：新田　隆一、奇二　正彦
・染川さんの秘蔵展示写真大公開
実施者：小笠原 啓一、五月女　賢司、染川　香澄
・「企業」に●●してもらいたい&「企業」で●●したい！
実施者：大島　伸一
・「自然と人を癒しでつなぐ」を考えましょう！
実施者：藤井　亜希子、小林　毅
・日本的自然観を次世代に伝える企画
実施者：山田　俊行
・清里の森を歩きましょう
実施者：田中　宏樹、川村　悦子、斉藤　麻里子

■３日間のふりかえり

「この指とまれ！ミーティング」の成果を全体でシェア。アンケート記入後に小グループで３日間をふりかえり、気づきや感想などをわかちあいました。グループで出た意見の中から「これは皆さんにも伝えたい！」ということを発表していただきました。

主催者から閉会あいさつがあり、最後は昼食会場で交流を深めて解散となりました。

■"Konoyubi Tomare" Meeting (Spontaneous proposal & sign-up Meeting)

Themes for this meeting including continued discussion from yesterday's workshops and new issues were presented from participants, and each participant signed up and spent about 2 hours in a free atmosphere.　Some groups enjoyed Seisenryo's famous ice cream during this session.

※＝Organizer & Facilitator

・Let's talk about the 3rd *Tsunagu-Hito* Forum!
※ Wataru KIMURA
・Courage to Connect
※Hiroshi INOMATA
・We'd like to know more about "Connect by Drama"
※ Ayumi KASAI
・Let's seek charms of Japan and local communities!
Organizer & Facilitator: Aki SUGIURA
・Permaculture: Connect Nature and Living
※ Yasushi UMEZAKI
・Let's consider how to earn 1 million yen monthly by working as Tsunagu-Hito!
※ Ryuichi NITTA, Masahiko KIJI
・Exclusive Opening of Ms. Somekawa's treasured photos of exhibits
※ Keiichi OGASAWARA, Kenji SAOTOME, Kasumi SOMEKAWA
・I want corporations to do ○○○ & I want to do ○○○ in my corporation
※ Shinichi OSHIMA
・Let's discuss about "Connect Nature and People by Healing"
※ Akiko FUJII, Takeshi KOBAYASHI
・Planning for Handing Japanese View of Nature Down to the Next Generation
※ Toshiyuki YAMADA
・Let's Walk and Explore the Forest of Kiyosato!
※ Hiroki Tanaka, Etsuko KAWAMURA, Mariko SAITO

■General Meeting 7 "Report from Konoyubi Tomare Meeting" & "Reflection & sharing session"

We all shared fruits from Konoyubi Tomare Meeting. After reflecting and filling in questionnaires individually, we share what we learned and discovered, thoughts, and ideas in small groups. Then we asked several participants to present their thoughts in public.　After closing address from the organizers and the farewell lunch, the 3-day forum came to an end.

つなぐ人フォーラム実施報告

アジアに広がる「つなぐ人」のネットワーク
アジアの事例紹介（報告者：増田 由香子）
ワークショップ報告
プレゼンテーション／ワークショップなど　タイトル一覧

アジアに広がる「つなぐ人」のネットワーク

～アジアからゲストを招へいした意義とこれから～

Growing *Tsunagu-Hito* Network in Asia:
The Significance of Guest Invitation from Asia and the Future Outlook

つなぐ人フォーラム実行委員会
Tsunagu-Hito Forum Executive Committee
事務局長　　川嶋 直
Tadashi Kawashima, Secretary General

「インタープリテーション」はメッセージと人をつなぐ技術です。

自然（公園）の中で、動物園・博物館・科学館・美術館などの展示の前で、エコツアーなどの機会に、そして様々なメディアを通して行われている、「インタープリテーション」（伝える技術）の役割を確認し、様々な現場の経験や技術を分かち合うことを通じて、「つなぐ技術」や「学びの場づくりの知恵」を高めあうことを目的に、昨年（2008年）より「つなぐ人フォーラム」を企画・開催してきました。

第２回にあたる今回は、韓国、中国、台湾、インドネシア、マレーシアなどアジア各国・地域で活躍する「つなぐ人」をお招きして、それぞれの取り組みについてご紹介いただきました。

また、これを契機にゲストのみなさんと話合いを行い、アジアにおけるインタープリテーションのネットワーク（正式名称：Asian Forum for Interpretation－Tsunagu-Hito）を設立することができました。このネットワークでは、アジアの国々・地域で活動する「つなぐ人」同士がつながり、様々な現場の経験や技術を分かち合うことにより、アジアにおけるインタープリテーションの向上と普及を目指していきます。生まれたばかりの小さな芽ですが、アジアのみなさんと力を合わせて大きく大切に育てていきたいと考えています。

"Interpretation" is a technique to connect messages and people.

Interpretation has been used not only in outdoor fields, but also actively used in various facilities such as zoos, museums, science centers, art museums, and eco-tours. Beyond these domains, we planned and held the 1st *Tsunagu-Hito* Forum in 2008 to enhance "techniques for making connections" and "creating new learning opportunities" through identifying the role of interpretation and sharing experiences and skills.

The 2nd *Tsunagu-Hito* Forum in this year invited active *Tsunagu-Hito* from Korea, China, Taiwan, Indonesia, and Malaysia as guest speakers in order to introduce their approaches and activities.

Moreover, we took this opportunity to have meetings with Asian guests, and established interpreters' network in Asia (official title: Asian Forum for Interpretation – *Tsunagu-Hito*.) The aim for this network is to make connections among active *Tsunagu-Hito* in different countries and areas in Asia, and enhance and spread "interpretation" through sharing experiences and techniques. We wish that we people from Asia work together and nurture this newborn small sprout with care to a big fruitful tree.

◆アジアの事例紹介をしていただいたゲストの皆さん （Guest speakers from Asia）

Mr. Zeng Hongying

Mr. Byung Joon Jung

Mr. Feri Prihantoro

Ms. Bernadette D. Joeman

Mr. Ju Chou

中国における環境インタープリテーションおよび“環境教育基地”の発展についての概論

曾 紅鷹（中国国家環境保護部・宣伝教育センター副室長）

１．環境インタープリテーションの背景

中国における環境教育は 70 年代の終わりに始まり、90 年代の終わりに急速に発展した。環境インタープリテーションは環境教育から派生したものではなく、経済・文化・観光産業の成長と共に約 10 年前に始まった。環境教育をすすめる場所（教育機関や施設）は「環境教育基地」と呼ばれ、一般の人々の環境リテラシーや実践的な能力を向上させる「環境教育」「環境学習やトレーニング」「環境科学の普及」「環境情報の協議」を含む活動を行っている。

●環境インタープリテーション発展の歩み

1999 年～2003 年、インタープリテーションに関する研究論文が初めて発表。環境インタープリテーションについて初の包括的論評が「地理学の進歩」に掲載。初の修士論文完成など。2005 年、北京師範大学が環境インタープリテーション専攻の大学院生の募集を開始。大学に「環境と文化遺産インタープリテーションセンター」が設立され、資源調査や世界遺産などにおけるインタープリテーションの計画・評価についての調査研究を開始。ＧＥＦマナヅルプログラム事務所が米国インタープリテーション協会から 2 名の専門家を招き、「文化遺産インタープリテーションと環境意識教育の指導者ワークショップ」を開催。2006 年～2007 年には、中国環境保護部（ＭＥＰ）と中国国家科学技術部（ＭＯＳＴ）が「環境科学普及適用と評価規制のための国家教育基地」を出版（2006）。またＭＥＰの技術部が中国環境科学学会に対して「環境科学普及のための国家教育基地の評価と称揚」を委任。ＭＥＰの環境教育宣伝センター（ＣＥＥＣ）が初の環境教育ベース作業会議を組織し、環境教育基地発展の国家規模の環境インタープリテーション手法について意見交換を行った。2008 年、中国国家林業部（ＭＯＦ）が「中国の自然保護地域ハンドブック」の中で環境インタープリテーションと環境教育について言及。またＭＥＰとＭＯＳＴが環境科学普及の国家教育基地について共同受賞。また日本のＪＩＣＡの協力を得て環境教育基地の中日技術協力セミナーを開催。4 月から翌年 6 月にかけ、ＣＥＥＣは山東省と広東省において環境教育基地のパイロットプログラムを開始、地元の教師向けのガイドブックや教材作成の支援を行った。2007 年 11 月～2009 年 8 月、ＣＥＥＣは北京師範大学における「環境教育、インタープリテーション計画、博物館の手法についての研究」の委託・資金援助を、北京大学に対しては「植物園における環境インタープリテーションと市民参加についての研究」を委託・資金援助を行った。
今後の計画としては、ＪＩＣＡと協力して第 2 回全国環境インタープリテーションセミナーin 杭州を今月開催する予定。また、今年から 2011 年にかけ、ＭＥＰとＪＩＣＡが共同プログラム「中国国家環境教育実演基地（別称：中日環境情報交換計画）」を完了する予定。

インタープリテーションの概念は 99 年に観光産業研究者によって提案された。私の考える環境インタープリテーションとは、環境教育と環境コミュニケーションの非公式のプロセスであり、教育の明確な目的を持ちながらも、一般の人々や特定の対象者に対してより娯楽的かつ市場志向的でバラエティに富んだ“娯楽”“余暇”“教育”など多機能性を持つものである。

２.「環境教育基地」: 非公的な環境教育・広報を効果的に広める

経済発展や観光産業・環境教育の発展は、中国における環境インタープリテーションの広がりをすすめる主な要因であり、推進力になった。経済発展や観光産業の発展は時として過度な開発や環境への大きな負荷につながることがある。

●関連する国の方針

96 年にＳＥＰＡ（中国国家環境保護総局、現在のＭＥＰ）は他の部局と共に 15 年計画（1996 年～2010 年）の「国家環境教育とコミュニケーション実施計画」を発布し、この中で初めて地方の環境教育基地の設置が要求された。また、06 年 12 月には他の２つの部局と共同で「第 11 国家経済五ケ年計画における環境教育と宣伝推進ための指針提案」を発布した。この指針も環境教育基地を省（県）や市レベルの環境教育基地の設置を推し進めた。

●「環境教育基地」とは

環境教育基地とは、一般の人々に対して開かれた環境教育や環境インタープリテーションの拠点となる組織、教育機関や場所を指す。環境教育基地は良い環境管理の基準を満たしていること、また総体的にＥＳＤ（持続可能な社会のための開発）をゴールとしていること、そして社会的な信用と徹底した環境プロフィールを有し、環境についての学びの機会と資質を一般市民に提供する場であることが条件となっている。

ＣＥＥＣの調査結果によると、08 年 12 月までに中国の全 31 省（県）の内、22 省にいて 327 か所の環境教育基地が設置されている。また 1000 か所以上の市・郡レベルの基地が地方の環境保護局により認められている。

環境教育基地にはいくつかのカテゴリーがある。

１） エコタウンやエコヴィレッジ
２） 博物館（科学技術博物館、自然史博物館、展示センター、ビジターセンターなど）
３） 公園や保護区（2395）
４） 動物園（210）、植物園（120）、水族館（44）
５） 環境関連施設（土地や水の保全区、浄水場、ごみ処理地、環境監視区、危険廃棄物処理施設など）

その他には企業（鉱山公園、企業の環境保護施設、エコフレンドリー企業など）、研究機関（大学の提携展示施設や開放研究室、野外エコ観察地など）、学校（グリーンスクール）など。

環境教育基地の評価については、国家レベルでは評価基準である「質的評価法」で、また地方（省、市、郡レベル）においては量的または質的評価法を使って行っている。

Introduction of the Development of Environmental Interpretation and Environmental Education Base in China

Zeng Hongying
(Deputy Director, Center for Environmental Education and Communication, Ministry of Environmental Protection of P. R. China)

1. Background of the Environmental Interpretation

Environmental education (EE) was started in the end of 70's and developed fast at the end of 90's in China. Environmental interpretation (EI) concept and research just began ten years ago along with the development of economy, culture and tourism, and it was not really stemmed from EE. The places and institutions where to implement EE are called "Environmental Education Bases" and implement EE, environmental learning and training, environmental science popularization, environmental information and consultation, which improve the environmental literacy and practical capability building of the public.

●History of the Development of Environmental Interpretation in China

Between 1999 and 2003, the first article on interpretation and the first comprehensive review paper on EI was published in *Progress in Geography.* Also the first master-degree thesis on EI was finished. In 2005, Beijing Normal University began to recruit post-graduate students majored in EI. Environment and Heritage Interpretation Center of Beijing Normal University was established and began the research on interpretation resource survey, planning and evaluation of EI of several world heritage sites. GEF White-crane Program office held the training workshop themed *"Heritage Interpretation and Environmental Awareness Education for Trainers Workshop,"* by two American experts from NAI (National Association for Interpretation.) Between 2006 and 2007, Ministry of Environmental Protection (MEP) and Ministry of Science and Technology of China (MOST) co-published National Education Base for Environmental Science Popularization Application and Evaluation Regulation. Dept. of Technology of MEP authorized China Society of Environmental Science to practice Evaluation and Commendation of National Education Base for Environmental Science Popularization. Also CEEC of MEP organized the first National Working Conference on EE Base, and exchanges the experience of the development of EE and methods of EI nationwide. In 2008, the Ministry of Forestry (MOF) published "*Handbook for Chinese Natural Protected Areas" which included chapters on EI and EE*. Also MEP and MOST jointly awarded for National Education Base for Environmental Science Popularization, and CEEC of MEP cooperated with JICA to hold the Seminar on China-Japan Technology Cooperation on Environmental Education Base. CEEC of MEP began to sponsor pilot program on EE base in Shandong Province and Guangdong Province and supported for developing the local teachers' guidebook and teaching materials. From 2007 to 2009, CEEP of MEP entrusted and funded Beijing Normal University to finish the research program *"the study on environmental education and interpretation planning and methods in museums"* and entrusted and funded Beijing University to finish the research program *"the study on environment interpretation and public participation in botanical gardens." In* 2009, CEEC of MEP will cooperate with JICA to hold the Seminar on Environmental Interpretation in Hangzhou (the 2nd time nationwide.) MEP of China and JICA will finish the cooperation program "China National EE Demonstration base (also be called Sino-Japan Environmental information exchange platform)" between 2009 and 2011

In China, the concept of interpretation was put forward in 1999 by the tourism researcher. I think EI is a process of informal environmental education and communication, it has clear objectives of environmental education, and also it is more entertainment and market-oriented, changeable, and with non-controlled audience or target group, so it has the multi-functions of entertainment or leisure, education, and this also can be explained why that environmental interpretation comes from tourism interpretation.

1. 2. Environmental Education Base: effective carrier for informal EE and environmental publicity

Development of economy, tourism, and EE has become major pushing power and key factors for the development of environmental interpretation in China. Economic development and the development of tourism sometimes impact to the environment.

●Related National Policies:

In 1996, SEPA (the current Ministry of Environmental Protection, MEP) along with other governmental agencies issued the *"National Action Plan for Environmental Education and Communications" (from 1996 to 2010).* In the action plan, it was proposed for the first time to call for setting up local environmental education bases. In Dec. 2006, SEPA again joined the other two departments to issue the "*Suggestions for Guiding Environmental Education and publicity in the National Economic Eleventh Five-Year Plan",* which again confirms the principle about setting up environmental education bases on municipal and provincial levels.

●What is Environmental Education Base (EEB)?

EEB is defined as an organization, an institution or a place that is open to the public, with function of EE and EI, with good environmental management measures, and following the general goals of ESD, and offer the public basic environmental learning opportunity and qualification with social reputation and complete environmental profiles.

Based on the incomplete statistics made by CEEC, by December 2008, there have been 327 provincial EEBs among 22 of the total 31 provinces in China. The more than 1000 municipal and county levels EEBs have been recognized or awarded by local EPB.

There are several categories of EEB.

(1). **Eco-towns and villages** (eco-village, towns of pretty scenery, eco or green agriculture demonstration areas, eco-farm and land & water conserving areas)

(2). **Museums** (Sciences and Technology Museums, Natural History Museums, Exhibition Centre, Visitor's Centre etc.)

(3)**Parks and conservation areas (2395)** (Famous scenic sites, geo-park, wetland parks, historic and cultural heritage sites)

(4) **Zoos (210), botanical gardens (120), and aquariums (44)**

(5)**Environmental facilities (**demonstrative sites for land and water conservation, wastewater treatment plants, landfills, environmental monitoring stations, and processing centers for hazardous wastes)

Enterprises (mine parks、environmental protection facilities of enterprises, environmentally friendly enterprises), **research institutes** (open labs and affiliated exhibition halls of universities, outdoor eco-observing sites, institutes, and factories), and **schools** (mainly the green schools) are also excellent potential targets to be developed as environmental education bases.

Evaluation of EEB is done through National evaluation criteria (Qualitative Evaluation Method) and Criteria on the local level (provincial and municipal level; Quantitative or qualitative Evaluation Method.

韓国の環境教育と解説家（インタープリター）の現状

ジョン・ビョンジュン（韓国環境教育ネットワーク委員長兼事務局長）

韓国では各地域で活動していた実践者や研究者が 2004 年に初めて集まり、韓国環境教育ネットワーク（KEEN）設立の準備会議が開かれた。そして 2005 年にネットワークが設立され、毎年環境教育の大会などを開催している。昨年からは全国インタープリター大会も始まり、今年は先月に第 2 回大会を開催した。

運営原則として、正式名称は「韓国環境教育ネットワーク」とし、英名は Korea Environmental Education Network、略称を KEEN とした。KEEN の基本的な性格は「差異と多様性を尊重する」である。また KEEN のネットワークの構造的な特徴は縦と横の 2 つの構造を持っていることにある。縦の構造をみると、各会員は複数のネットワークに同時に参加できる。たとえば、地域のネットワークや主題ネットワーク、人的なネットワークへの参加が可能である。

KEEN が設立する時に 7 つの主要課題を設けた。（1）環境教育指導者（インタープリター）の認証制度、（2）「環境教育振興法」の制定、（3）情報交換拠点としてのウェブサイトの構築、（4）環境教育大会、（5）国際交流事業振興、（6）環境教育センターの設立推進、（7）共同保険制の導入で、（1）～（5）はすでに行っており、現在は（6）と（7）を計画している。

近年、韓国の環境教育は制度化されてきている。「社会環境教育振興法」は 1983 年に初めて言及され、2008 年に制定、9 月に施行されることになった。この法律の施行・運営で最も大切なことは「合議と尊重」である。また、この振興法の中で現在「プログラム認証制度」をつくっている。このプログラムとは施設・指導者・予算・活動をすべて含んでいる。この認証については認証支援団（認証審議委員）が実施している。支援団の資格条件としては、社会環境教育指導者 2 級所持者であること、自然研修や定期的な教育を行っていることとなっている。認証制度の導入による期待効果はいろいろな活動を通して環境教育やネットワークの活性化をはかることである。

また、プログラム認証とともに進めているのが「社会環境教育指導者制度」で、1～3 級を認定している。3 級の資格を取ると韓国では「解説家、案内者」と呼ばれる。2 級は解説＋運営コーディネートができること、1 級は解説＋運営調整＋企画管理ができることを目標としている。各級の仕事の分析については 2008 年の 3 月にワークショップを実施して決めた。このような制度を導入する際、既存のインタープリターについてどのように認定するかについて意見が出された。3 級は環境教育の活動経験が 3 年以上、2 級は 6 年以上、1 級は 9 年以上持ち、養成課程の研修を履修した人に資格を与えている。また、認定については広域の環境教育ネットワークと地域の環境教育団体の両方が養成課程を実施している。今、韓国の各行政機関（森林庁など）でも資格制度をすでに開始したり、始める準備をしている。

KEEN のもう一つの大きな事業として、「全国環境解説者（案内者）大会」の開催が始まっている。大会の目的は政府が推進している環境教育振興法の中の「社会環境教育指導者（インタープリター）」の認識を社会に広めることにある。大会の内容としては、事例紹介、ポスターセッション、体験会、大会の審査委員を構成して事例コンテストを行うなど、その成果を一般化している。事例コンテストは公開発表・公開討論・公開審査を経て行なわれる。昨年の第 1 回大会はつなぐ人の実行委員長・小林毅さんを招き、講義をしてもらった。今年の第 2 回大会では、体験ブースやポスター発表、コンテストは場所別（森、川、公園など）とテーマ別（エネルギー、食べ物など）の分野別に行い、日本からはつなぐ人の事務局長である川嶋直さんをお招きした。今年は全国から 74 チームが参加、来年は 100 か所以上の参加を期待している。（今年の大会の写真を説明しながら紹介）

コンテスト実施後は受賞者を連れて海外研修を行っている。昨年は日本を訪問した。今年も日本での研修を準備している。
今後も韓国と日本、他のアジア諸国とのインタープリターのネットワークが活性化することを願っている。

Present State of Environmental Education and Interpreters in Korea

Byung Joon Jung
(Chairman & Secretary General, Korea Environmental Education Network)

In Korea, people who had been practicing environmental education in different areas first gathered and held a preparatory meeting for Korea Environmental Education Network (KEEN) in 2004. In 2005, KEEN was established and we had hosted Environmental Education Meeting every year. KEEN also started nation-wide meeting for interpreters last year, and we just held the 2nd meeting last month.

The official name of this organization is "Korea Environmental Education Network" and its abbreviation is KEEN. The basic character of KEEN is to respect differences and diversities. And structural character of KEEN is its multiple network systems. A member of KEEN can participate in multiple networks depending on areas, subject matters, and human resources.

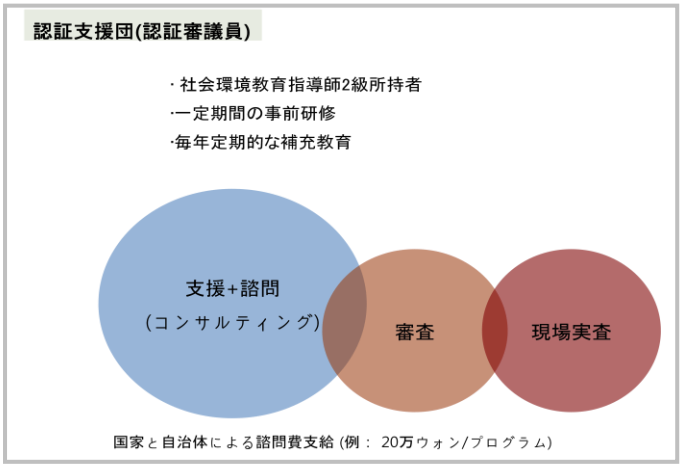
When KEEN was established, we set up seven main subjects. (1) Authentication of environmental interpreters, (2) enactment of "Promoting of Environmental Education Law", (3) construction of website as a base for information exchange, (4) National EE Meeting, (5) progression of international exchange projects, (6) promotion for EE center, and (7) joint insurance system. We already implement (1)-(5) and we plan to bring (6) and (7.)

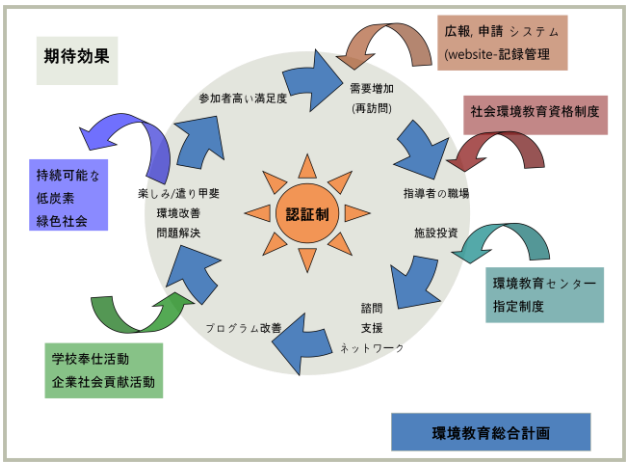
Environmental education in Korea has been institutionalized in past several years. "Promoting of Environmental Education Law" was first referred in 1983 in Korea and established and enforced in September, 2008. Consultation and respect are most important concepts for enforcing and operating this law. In this law, we are working on establishing certification system for Environmental Education Programs. These programs include facilities, educators (and interpreters), budgets, activities, and so forth. It is certified by "certification supporter (certification review committee member)." This "certification supporter" needs to obtain the second-grade of environmental educators and to be trained regularly. We expect good effectiveness of the enhancement of EE and activation of EE network through introducing this certification system.

We also work on another certification system, "Environmental Educator & Interpreter Certification System" and this certifies grade 1 through grade 3. You are recognized as "interpreter for guide" with grade 3. If you obtain grade 2 certification, you need to be an interpreter as well as an operation coordinator. If you obtain grade 1, you need to be an interpreter, a coordinator, a planner, and a manager as well. In March of 2008, we held workshops to decide detailed job analysis for each grade. Also we discussed criteria for existing interpreters. The 3rd grade interpreter needs to have more than 3-year experience of practice, the 2nd grade interpreter needs to have more than 6-year, and the 1st grade interpreter needs to have more than 9-year practices, and each grade need to complete different training courses. These training courses and certification reviews are provided by both extensive environmental education network and local EE organizations. Now different governmental agencies such as Forestry Agency adopt or plan to adopt different certification systems.

One of the main projects of KEEN is National Interpreters (Guides) Meeting, and its primary purpose is to publicize "EE educators & interpreters" which is referred in "Promoting of Environmental Education Law," the government promotes. At this meeting, we have case studies, experience programs, poster session, and EE & interpretive program contest. This contest is done by open presentation, open discussion, and open judgment. Also we generalize the fruits from the meeting. Last year we invited Mr. Takeshi Kobayashi and he gave us lecture. We had the 2nd meeting just last month. More than 74 teams participated and we had poster session, experience booths, contest for each categories. Mr. Tadashi Kawashima joined us this year. We expect more than 100 teams participating next year.

After this contest, we take recipients to do training trip abroad, and we visited Japan last year. Now we are preparing another trip to Japan with this year's recipients. I hope network among interpreters from Korea, Japan and other Asian countries will become more active and meaningful in the future.





コミュニティ、自然、地方の知恵のつながりを通した市民社会の確立（インドネシア）

フェリ・プリハントロ（ビンタリ財団プログラムマネージャー）

ビンタリ財団は持続可能なコミュニティの実現を使命として設立されたＮＧＯで、主にインドネシア・ジャワ島のスマラン市を拠点に活動している。スマラン市は沿岸地域と山岳地域、その間に都市部がある自然の変化に富んだ所で、私たちの組織は環境教育を持続可能なコミュニティ形成のためのツールとして行っている。私たちの活動は単に自然保護だけでなく、経済的また社会的に持続可能な開発のための教育（ＥＳＤ）を行っているが、インドネシアでは「環境教育」という言葉が一般的によく知られているため、ここでは環境教育という言葉を使っている。

我々の活動は公的な教育（学校教育）だけでなく、インフォーマルな教育（社会教育、コミュニティ教育）も含んでいて、地域の問題・課題と地球規模の問題（たとえば地球温暖化など）とをつなげる取り組みを心がけている。

我々の活動はすべてコミュニティベース（住民主導）であり、まずはコミュニティにどんな環境の影響が出ているかを一緒に調査することからスタートする。この調査には専門知識が必要なため、大学機関や企業などから協力を得て行っている。

５つの主な活動

（１）環境教育（ＥＳＤ）

環境保護の側面だけでなく、経済的・社会的な側面を内容に必ず含めている。学校教育においては主に小学生を対象にして行っている。また、情報交換の場として、インターンシップ（実習制度）やエコツアー（スタディツアー）も行っている。エコツアーでは、コミュニティのエンパワーメント（自らどうすべき考え、行動を起こしていく力）の重要性から、参加者（外部からの視点や意見）とコミュニティの視点をつなげ、相互的に学べる内容を目指している。

（２）アグロフォレストリー

農業と森林保全を複合させた「農林複合経営」の活動。気候変動はすでにインドネシアに影響を与え始めている。例えば種まきの時期がずれ、既存の農業用季節カレンダーが使えなくなってきており、コミュニティはこのことを理解し、対処していかなければならない。そのため、気候変動の専門家を招き、人々に「何が」「なぜ」起こっているのかの勉強会を開き、今後自然環境に即した持続可能な農業活動のための方法を考えるプログラムを行っている。既存の化学農業から有機農業への転換の活動も行っている。

（３）廃棄物管理

都市部では今までゴミの分別やリサイクルのしくみがなく、ゴミはすべて一緒にまとめて排出場に持って行くことしかできていなかった。お金を払ってゴミを回収してもらうのではなく、ゴミから収益が出てコミュニティに還元していく方法を考えた。これによりコミュニティ自体がゴミ管理に関わることで環境改善につながり、経済的にも潤うことができた。

（４）汚水管理

家庭排水だけでなく、スマラン市には 100 以上の小さな豆腐・テンペ（発酵させた大豆を油で揚げた食品）の工場があり、汚水処理施設がないために問題になっていた。20 年間、工場からの汚水は川に垂れ流しされていたにも関わらず、工場に勤務する人が地域住民の多数を占めるため、誰からも苦情が出なかった。環境への意識が高まりはじめ、この問題に対処していかなければという認識が出てきたこともあり、汚水処理施設を造った。それだけでなく、私たちがすすめたのは「よりクリーンな生産」、つまり汚水を減らすために製造方法（燃料を節減し、使用する水の量を減らす技術）を導入した。それにより収益も向上した。

（５）沿岸部の保全

気候変動による海面上昇により、この 3 年間で約 2～4km の沿岸を失った。沿岸部の保全は主にマングローブの植林を行うが、その他に地元の漁師やマングローブを伐採して魚池を作って養殖を行っている業者が、気候変動による自然環境の変化に対応しながら昔ながらの智恵や技術を使った漁法の見直しをすることで収入を増やし、環境への関心や理解を得る活動も行っている。

コミュニティのエンパワーメントの向上、持続可能な社会の実現のためには、活動を少しずつ着実に積み上げていくことが必要である。まずは住民が自分たちの態度や行動を見直すということ。社会や文化を壊すことなく変わる方法を学ばなければならない。次に個人とコミュニティ、コミュニティとコミュニティの相乗効果を学ぶということ。その次はプログラム計画とアクションプラン。過去 30 年、インドネシアはスハルト政権下においてコミュニティが自ら考えるという機会を与えられなかった。政府から与えられるものをすべてそのまま受け入れてきた。政権が変わった今、住民は自ら考え行動する必要が出てきたため、たくさんのＮＧＯが組織され、非政府団体の活動が活発化したという経緯がある。コミュニティのエンパワーメントのためには、ＮＧＯや専門家などのステークホルダーと連携して環境をどう管理していくかを学べるようにしなければならない。そして最終的には、自分たちの社会や文化を守りながら環境を管理していくことを学ぶと考えている。

最後に私たちが大切にしている４つの柱を紹介して発表のまとめとしたい。

１．　コミュニティの自然、資源、文化、他のコミュニティと人々をつなぐ
２．　社会状況を理解する
３．　環境保護と経済的社会的側面の融合
４．　参加型の学び

Establishing Civil Society through Connecting Communities, Nature, and Local Wisdom (Indonesia)

Feri Prihantoro (Program Manager, BINTARI Foundation)

BINTARI Foundation is the NGO and its ultimate mission is to achieve sustainable community. We mainly work in Sumarang City , Java in Indonesia , which consists of coastal area, mountains, and the urban area in between. In our organization, environmental education and interpretation become tools or umbrellas to achieve sustainable community. In both formal and informal education, we try to connect local issues and global issues such as climate change issues and sustainability.

We have programs in our organization. First, we do environmental education or you call ESD (education for sustainable development.) Although the content of the program includes not only environmental aspects but also integrated to economical and social aspects, we keep this term "environmental education" because it is well known in our country. Agro-forestry is another program which integrates agriculture and forest conservation. In urban area, we have big issues such as solid waste management and waste water management. Waste water comes from not only household but also small industries. For example, in Indonesia, small tofu and tempeh (deep-frying fermented soya beans) factories drain waste water without proper treatment. Lastly, we do coastal area nature conservation.

All our activities are community base which means we start planning with the community and research the impact to the community. Since the community needs special knowledge for this, we often connect the community and universities or companies.

1. Environmental education

Elementary school is a main target for formal education. Also it is important to exchange information such as internship and eco/study tour. In eco/study tour, it is important to connect the community and participants because they can learn from each other. Community empowerment is the idea that people in the community should come up with their own ideas first and decide what they should do. We introduce outside opinions to the community so that they can clear their ideas.

2. Agro-forestry

Climate change already impacts on our country. For example, our seasonal calendar has already changed and the community needs to understand what and why it happened. We ask climate experts to come to the community and teach how to cope with their activities according to the present weather such as the planting time. The community can get new information and do something to survive their activities with connecting nature. Also there also is the transition of chemical agriculture to organic agriculture.

3. Solid waste management

In the city area, people put all wastes in one container and brought it to temporary disposal area, and there were no recycling system. So we've worked on how the community could get money by managing waste. In this way, the community can join the management of their waste, make their environment better, and get money at the same time.

4. Waste water management for micro and small enterprises

There are about more than 100 small tempeh factories in the city, however, they do not have water treatment facilities. For 20 years, factories have drained their waste water to the river and nobody complained about it because many people were employees of the factories, but it is bad for their environment. So we approached them and suggested them to increase their income by the cleaner production. We teach them how to make tofu or tempeh more eco-friendly that they can decrease energy and water and increase their income.

5. Coastal conservation

We've already lost around 2 to 4 km of the coastal line because of climate change in 3 consecutive years, and mangrove conservation is important. We plant mangrove and also try to increase incomes for the local fishermen and fish pond farmers. We develop together a simple technology from local wisdom as community adaptation efforts for climate change impacts.

It is a necessary to do step by step activities to develop and empower the community and achieve their sustainable society. First, it is important for them to learn and improve their attitude and behavior. They should learn that they need to change without destroying their society and culture. Secondly, they need to learn synergy with community interaction among people in the community as well as the interaction between the community and outside of the community. Then they learn how to develop programs and action plans. In last 30 years in Indonesian system, it is called Suharto era, the community never had the opportunity to give their opinions and all ideas from government. Now the government has been changed and the community needs to do programs on their own so that many NGOs started their activities. To empower the community, the cooperation with stakeholders (partners) such as NGOs and experts is necessary, and they learn how to access and manage their surrounding resources. And finally they learn how to manage their environment with conservation of their society and economy.

In conclusion, there are 4 significant points for our interpreting process.

1) Connecting people and community with nature, resources, culture, and other community.
2) Understanding with social condition
3) Integration of environmental conservation with economic and social aspects
4) Participatory learning

マレーシア・サバ州における環境インタープリテーション
ベルナデット・ジョーマン（サバ州森林局ＲＤＣマネージャー）

マレーシアのサバ州にある Rainforest Discovery Centre（ＲＤＣ）は州の森林局が管理運営する環境教育センターである。森林局は林業のライセンスを管理する部局だったが、近年は持続可能な森林管理を目指し、2011 年を目標に移行しようとしている。これに伴い、人々とのコミュニケーションを通して持続可能な森林管理への理解を得るために環境教育やインタープリテーションが導入された。森林局の業務は従来の森の伐採から森林および環境の保全へと変わり始めたと言える。

このような経緯のもと、1996 年にサバ州の森林についての教育や観光・レクリエーションを目的にＲＤＣは創設された。現在サバ州においては最も活発な環境教育や環境インタープリテーションのセンターとなっている。

ＲＤＣでは小さな子どもから大人まで、様々な年齢層に向けて環境教育活動を行っており、教員向けのトレーニングも行っている。教員にはセンターでの研修だけでなく、森での直接体験を持ち帰ってもらい、森林管理や環境保護の将来を担うであろう多くの子どもたちに知識や体験を伝えることを期待している。

ＲＤＣはいくつかのコミュニティに囲まれているため、コミュニティを巻き込んだ住民への教育が重要だと考えており、「セピロック・ジュニアレンジャーズ」というプログラムを行っている。地域の子どもたちを対象に、彼らが自分たちの身近な自然に誇りを持ち、生きものすべてに感謝の気持ちを持つことを目的としている。自然資源へのバンダリズム（破壊行為）が問題になっていたため、解決のためにもこのプログラムは重要だと感じている。また、リクエストに応じて他の部局や団体向けのネイチャーインタープリテーションコースも実施している。

インタープリテーションの技術は環境教育プログラムにとって重要なツールとなっている。様々なタイプの来訪者が年間 3000～4000 人訪れるＲＤＣでは、五感を使うアクティビティ、実物や小道具、ゲーム、理解しやすい展示などを使い、メッセージを伝えるための様々な取り組みをしている。センター内の展示も、来訪者を引き付けるサインや解説ボードを作るように心掛けており、たとえば「ソテツ」の説明も単に植物の名前や特徴を説明するだけでなく、「ソテツは生きた化石！」など、興味を持ち誰もが理解しやすい展示を目指している。

サバ州の“つなぐ人”は「ガイド」と呼ぶのが一般的で、「インタープリター」という言葉は一般的ではない。ガイドは主にツアー会社のガイド、フリーランスのガイド、ネイチャーセンターのスタッフの 3 種に分類される。フリーランスガイドは元ツアー会社のガイドだった中高年が多く、ガイドの知識や経験が豊富なのが特徴。ネイチャーセンターのスタッフはＲＤＣでのＩＰの専門家であり、やはり環境教育やＩＰの知識や経験が豊富である。多くのツアーガイドは豊富な知識やガイドの経験はあるが、ＩＰの技術はまだ十分ではない。その結果、ツアーの魅力が足らず、来訪者の学びも十分得られないこともある。

サバ州はマレーシアの環境教育においてリーダー的存在。環境教育ネットワーク「ＳＥＥＮ（Sabah Environmental Education Network)」は 32 団体で構成され、そのうち半分は環境教育の実践団体である。ＳＥＥＮは今のところマレーシアで唯一の環境教育ネットワーク。私たちはできるだけ知識や経験の情報を共有し、活動の向上を目指して協働している。

次に学生が行ったケーススタディを紹介したい。ＲＤＣにおけるセルフガイドによるインタープリテーションの効果について、アンケートを取って調査した。その結果、ＲＤＣのインタープリテーションの教材はセルフガイドのビジターにとっては年齢や出身を問わず魅力的で効果があるということがわかった。以下、ＲＤＣにおけるインタープリテーションの展示解説板やハンズオンの写真を紹介したい。

最後に、今回このような素晴らしい機会を頂き、日本に来ることができ、多くの方たちとインタープリテーションについての意見を交換できたことを本当に感謝している。「Tsunami （津波)」が世界的な言葉になったのだから、「Tsunagu-hito（つなぐ人)」もきっと世界共通の言葉になるだろう。近い将来、「アジアつなぐ人ネットワーク」ができることを楽しみにしている。

RDCにおけるインタープリテーションの例
Examples of interpretive materials at RDC

ハンズオンの展示は興味を引きます！
Hands on Interpretive materials attracts!

Environmental Interpretation in Sabah, Malaysia

Bernadette D. Joeman
(Manager, Rainforest Discovery Centre, Sabah Forestry Department)

Rainforest Discovery Centre is an environmental education center under the management of the Sabah Forestry Department which is a state department looks after the forest in Sabah. Now the Forestry Department will work on a sustainable forestry management especially by 2011, and all licenses for logging will be stopped. Some licenses have already been stopped since more than 10 years ago, and we are now practicing what we call "sustainable forestry management." And also environmental education and interpretation come in to the face of the forest department because we need to communicate with people. We are not going to cut the forest in a way we used to apply and conserve the forest.

RDC was established in 1996, and our aim is to educate the public about the forest of Sabah and how we can conserve this area for education, a bit of tourism and recreation. RDC is currently considered active environmental education centre in Sabah.

RDC provides environmental education programs to all ages from small children to adults. We also provide environmental education training programs for teachers. We bring teachers to RDC as well as natural area, and they can bring back not only knowledge but also their experiences to the classrooms where they can reach out more people (students) who will be managing the forest and environment in the future. RDC is also a centre for the public to learn about rainforest.

RDC is surrounded by the communities so that we do community involved program called "Sepilok Junior Rangers," and we would like to make children feel proud of being a part of Sepilok community and appreciate the animals live in. We also conduct nature interpretation courses requested by other departments and other organizations.
RDC staff uses interpretation techniques in every environmental education programs. We think it is important because we deal with a variety of people, not only children but also different types of visitors. RDC provides programs to approximately 3000 to 4000 people per year. Tools include objectives, sensory activities, games, and ways of explaining terms that audience can understand and ways to get message across. RDC also try to make comprehensive and attractive signs and boards to catch people's attentions.

There are 3 types of guides (Tsunagu-hito) in Sabah. Guides attached to tour companies, freelance guides, and RDC staff. Most tour guides have very good knowledge and are willing to share their experiences and knowledge with tourists; however they are lack of interpretive skills.

Sabah is leading environmental education in Malaysia because we are the only state which has environmental policy. Sabah Environmental Education Network (SEEN) is the first network and currently the only one in Malaysia. A half of 32 members are environmental education organizations, and we all work together by sharing resources to enhance EE activities in Sabah.

One student did a case study to assess the attractiveness of the interpretive materials at the RDC among self-guided visitors. We try to provide interpretive panels for self-guided visitors meaningful and attractive. Her study shows that the interpretive materials at RDC are attractive enough for self-guided visitors to read irrespective of their age or where they come from.

To conclude, I would like to thank wonderful people and this opportunity bringing me to the forum to exchange ideas about interpretation with all of you. One last thing to say that if "Tsunami" can be accepted worldwide, I think "Tsunagu-hito" will be accepted as well. So I am looking forward to call our network as "Asian Tsunagu-hito Forum" or "Asian Tsunagu-hito Network" in near future.

台湾のインタープリテーションの傾向：市民参加の観点から

周 儒（国立台湾師範大学大学院環境教育研究科教授）
林 慧年（義守大学レジャーマネジメント科助教授）

【周氏】
大学教授としてまた研究者として環境教育を指導しているが、同時に社会におけるインタープリテーションへの理解を向上させたいと日々活動している。また、台湾のインタープリテーションの傾向の本質についての洞察を続けている。

これらの写真は日本の森林や里山、自然学校などの活動でよく目にする光景と似ているだろう。あらゆる年齢の人たちが関わっていて、ガイドを通して、また自らの気づきや保護活動を通して、自然に対する感覚や心を開き、より多く自然と接することでより深く理解ができる。

あらゆる年齢のボランティアがこのような活動に参加したい、関わりたいと考えている。このことは台湾における興味深いインタープリテーション体験の傾向を示唆している。実は台湾の国立公園局の 95%以上のインタープリテーションプログラムはボランティアのインタープリターが提供している。台湾は「お得なフリーランチ」、つまりボランティアの善良な意志・意欲に非常に依存していると言える。これは良いことでもらい、一方弊害もあると考える。

この写真を見るとあらゆる年齢の人がインタープリテーションに関わっていることがわかる。このガイドビジネスは 30 年以上も続いていて、多くのボランティアが自然に魅了され、自然の管理人（守り人）のような感情を抱く。もしかしたら日本の社会・文化と似ているかもしれない。文化遺産のインタープリテーションの場でもボランティアは非常に重要な役割を果たしている。この現状の裏には何か特別な現象や理由があるのではと考えており、現在も継続している私たちの調査研究の一端を紹介したい。

【林氏】
台湾におけるインタープリテーションのコンセプトはアメリカから初めて導入された。しかし、台湾社会の中で年月を経て変化してきている。近年、台湾の急速な社会変化に伴い、台湾におけるインタープリテーションは影響を受け、発展してきた。この表のように、政策、行政機関、ＮＧＯ、教育機関、社会変化が関係している。これらの社会変化は多くのボランティアインタープリターの増加や、ボランティアにインタープリテーション活動を依存する理由となっている。例えば、2000 年に台湾では週休 2 日制が導入され、人々の余暇の時間が増えた。これにより、多くの行政機関のボランティア要請が激増した。

インタープリテーションに一般の人々が関わる背景には２つの要素が考えられる。１つは西洋的な個人主義とは相反する東洋的な集団主義である。おそらくこれは日本でも同じ傾向かもしれないが、私たちは人と関わること、お互いから学び合うことを好む。我々の文化の本質であろう。もうひとつの要素は社会的な変化。我々にとってはインタープリテーションのスキルも大事であるが、インタープリテーションを行う上での「なぜ？」「アジア社会で何をインタープリテーションするのか？」がとても重要である。

「市民参加」は何も新しいコンセプトではない。台湾ではボランティアに頼ってインタープリテーション活動を行っているが、アメリカでも同じような考え方があり、「civic engagement（市民による社会参加）」と呼ばれる。これは専門のインタープリターがインタープリテーションのプログラムを計画する際に組み込むことを求められている。この２つのアプローチの相違点は、台湾における「市民参加」は序列的でない“ボトムアップ”の構造を持ち、一般市民の自発的な環境保護活動がベースになる。一方アメリカにおける「civic engagement」は、各組織がインタープリターに行うように勧めるトップダウンのアプローチである。

台湾のインタープリテーションの４つの傾向

（１）ボランティア制
台湾ではインタープリテーションは市民参加の社会的プロセスであり、ボランティア制を通して一般市民が環境に対する「管理者」の意識を持つことができる。つまり、最初は人と自然の両方が好きということでボランティア活動をスタートするが、時間経過や関わりの深さが増すにつれ、地域の自然を守る「管理者」としての意識が芽生える。これが「何を守るか」から「何のために守るか」の意識変化のプロセスとなっている。

（２）地域活性化
インタープリテーションを通してボランティアインタープリターが地域のアイデンティティを磨くまたは再構築する。インタープリテーション活動を行うとき、私たちは事物や事象の背後にある意味を考える。ボランティアはインタープリテーション活動を通して、この意味を考えると同時に、なぜ自分たちはこの活動をするのか、自分たちにとって何が重要なのかを考えるようになる。

（３）持続可能性
インタープリテーションは経済と環境の両方を持続可能にするツールであると信じている。多くの地方コミュニティにとって、インタープリテーションは環境を守りながら生計も守ることができる方法である。

（４）専門家技術
インタープリテーションは専門技術であり、様々な視点や実践により向上する。台湾においてインタープリテーションはまだ非常に新しい専門職であり、職業になるためには多様性→葛藤→認識のプロセスを経ていく必要がある。新しいということで多くのアイデア、自由な意見交換、どのようなアプローチがこの国では有効なのかを試すことができる余地があるため、良いことだと思っている。

台湾におけるインタープリテーションとは何なのか？インタープリテーションとは単に管理するためのツールではなく、ボランティア制と結びついた専門職であり、地方活性化と持続可能性とも関連している。大きな視点から見ればインタープリテーションは社会変革と関係していると言える。
では、なぜ私たちはインタープリテーションを行うのか？インタープリテーションを文化的な状況の下にとらえていかなければいけない。このつなぐ人フォーラムも多くのアジアの専門家たちが集まりアイデアを提供し、西洋社会とは異なるアジア独特のアプローチを学び合える場であると思う。今後継続的な研究として、どのような要素がアジアのインタープリテーションを形成しているのか、また現代社会の変化に伴ったインタープリテーションの在り方を模索していけたと思っている。

Trends in Taiwanese Interpretation: A Public Involvement Perspective

Ju Chou (Professor, Graduate Institute of Environmental Education, National Taiwan Normal University)
Hui-Nien Sylvia Lin (Assistant Professor, Department of Leisure Management, I-Shou University)

Dr. Ju Chou:
As a professor I try to be a researcher, but the same time I am trying to help bringing the capacity of interpretation up in the society. On the other hand, we are trying to look insight about what's the real essence of the trends of interpretation in Taiwan.

As you can see in Japanese forests, satoyama, or in nature schools, we also can find all different ages of people involve in connecting to nature through guiding and revealing themselves. People get more contact and insight by opening and touching their feeling to nature. And different aged volunteers participate in this work. This is very interesting trend in Taiwan's interpretation experience. More than 95% of interpretive services are provided by the National Park Service in Taiwan done by volunteers. Taiwan highly relies on "free lunch," good will from volunteers. So this trend is good but on the other side maybe not.

All kinds of people involved in interpretation and this business has more than 30 years history in Taiwan. Through leading and guiding, different ages of people fall in love with nature and get feeling of becoming stewards of nature. Maybe it is very similar to your culture and society. Even for heritage interpretation, volunteers play a very important role on that. So we think there must be phenomena or reasons behind this condition. We'd like to introduce our ongoing research today.

Dr. Hui-Nien Sysvia Lin:
We'd like to introduce you the idea about public involvement in interpretation. Interpretation was first introduced to Taiwan from US, but overtime it got change based on Taiwanese society and culture. The category of our social change includes policy, public agency, NGO, educational institute, and movement. Because of these changes, what happened now is we really rely on volunteers. Lots of people would like to be volunteer interpreters in Taiwan. Here is an example. In 2000, two-day weekend policy was introduced and people got more time to do recreational activities. That's why many agencies needed more people as volunteers to help.

There are 2 aspects in an involvement of the public in interpretation. One is eastern collectivism which is totally different from western individualism. We just like to socialize each other and learn from each other. So this is based on the nature of our culture.

The second aspect is social change. We believe it is very important to talk about interpretive skills such as how we can make interpretation better. But actually we also believe that it is important to know why we do interpretation what interpretation really is in Asian society.

Public involvement is not a new idea. In Taiwan, this means that we depend on volunteers to do interpretation. In the US, they also talk about a very similar idea and they call it "civic engagement." They try to encourage professional interpreters to incorporate skills needed for civic engagement interpretive programming. Which means, when they do the programs they try to engage people into the program. However, we still believe even though these two concepts are very similar, they still have some differences. In public involvement, the force is from a bottom to up because this is from the willingness of the volunteers for providing something and do some actions for environmental protection. In the US, it is top-down approach because the agencies encourage interpreters to do that.

So we conclude that there are 4 trends in Taiwan; volunteerism, localization, sustainability, and professionalism.

1. Volunteerism
In Taiwan, interpretation is a social process for public involvement in environmental stewardship through volunteerism. These volunteers may come to becoming volunteers because they like nature and people. But overtime as they get involved more, they feel the sense of ownership and protect their area. So this is the process of "care about" to "care for"

2. Localization
In Taiwan, interpretation is a practice to promote localization for volunteer interpreters to redefine and reconstruct their identities. When we do interpretation, we talk about the meanings behind the scene. We believe that volunteer interpreters talk about not only meanings of the objects but also about themselves. Because they find who they are and why this is meaningful to them and why they are doing this.

3. Sustainability
We believe interpretation is a tool to foster both economic and environmental sustainability. Perhaps for lots of local communities, it's the way that they can make a living as well as protecting their environment. Because when they do interpretation, they will make income as well as they can protect the natural environment in their community.

4. Professionalism
We believe interpretation is a profession that evolves diversely based on various perspectives and practices. Interpretation right now is still a very young profession in Taiwan, and to be a profession, it needs to go through the process of diversity, conflicts, and identification. Because it is young, we think it is very healthy to have different perspectives. Right now in Taiwan, we have so many volunteer interpreters. So in every agency, different group of interpreters do interpretation differently. This is good to have different ideas because in this way, we can exchange ideas and find out what kind of approach can work fast in Taiwan.

What is interpretation? We believe that interpretation is more than a management tool, but a profession associates with volunteerism, localization and sustainability. We would like to see interpretation in a bigger idea to link the change of the society. Why we are doing interpretation? Interpretation should be viewed under a social process within a cultural context. That's why we really appreciate this conference because we think this workshop is very meaningful. All Asian experts gathered to provide ideas and think about what the uniqueness of interpretation in Asia. So maybe we can find out the differences from western ideas what works fast in Asia. For future research, we can focus on how interpretation is shaped and what factors contribute its transformation in the contemporary society.

ＷＳ１　インタープリテーションでつなぐ

命をつなぐ～命をインタープリテーションする～

実施者：小林 毅（日本インタープリテーション協会
／岐阜県立森林文化アカデミー）
古賀 直子（助産師）

Ⅰ．ワークショップの概要

「命の大切さを伝えるメッセージ」では、どんな内容をどのように伝えたらいいのだろう？　子どもの頃、昆虫類を大量虐殺していた実施者の立場としては、子どもたちに対して植物や昆虫の命を粗末にしないで、というのも心苦しさがあります。今回は助産師さんと一緒に、そもそも命が生まれるとはどういうことなのかについて思いをはせ、参加者１人１人の命とかかわる経験の中から「命を扱う、命を伝えるインタープリテーション」とは何なのかを考えました。

Ⅱ．ワークショップの実施報告

１．参加者自己紹介（命との関わりについても触れながら…）

参加者 18 名から、「田舎に住んでいると人の死が近い存在。火葬も自分たちの手で行う」、「外来生物の命を絶ってしまっていいのか、扱いに困っている」、「動物園の飼育係をしているが、動物の母の美しさやたくましさを伝えていきたい」、「自分の出産を機に仕事を辞め育児に専念している。育児は今最大の自分の仕事」などさまざまな命とのかかわりや視点での自己紹介がありました。

２．助産師 古賀さんの命のお話

岡山県で自宅出産専門の助産師を開業している古賀さん。出産をしたことがある人は参加者中３名でしたが、産まれたことのある人は全員。病院での出産が今は主流となっているが、戦前までは自宅出産が主流だったこと、出産時女性の体の中で恋するホルモン「オキシトシン」が出て母と子は恋の状態に陥ることなど出産にまつわるさまざまな話を聞き、参加者は人の生について思いをめぐらせました。

３．全員で命について語ろう

「男性は産む瞬間を感じられるのか？」という点から話は始まりました。男性は生の瞬間に立ち会ったとしても女性と同じ感覚で産む瞬間を感じることは難しいが、母は美しい・たくましいと男性も女性も感じるのであれば、その母の姿を見せることで自然にそのことは伝わっていくのではないか、という意見が出されました。また、昆虫は卵を産むと死ぬものが多く、死にそうになると卵を体外に排出して死ぬものもいることから、生の裏側にある死に目を向けていくことも大事だという意見もありました。

性教育の分野では幼稚園児の頃を「魔法がかった考え方をする頃」、小学低学年の頃を「うんちの話で

盛り上がれる頃」、小学高学年の頃を「何でも気持ち悪がる頃」、中高生の頃を「全部知っている気になる頃」、その上に「成熟した大人」という段階があるという発達段階の考え方があることを古賀さんからご紹介いただき、「命の教育にも段階が必要なのではないか」という感想が聞かれました。

４．グループごとに命をどう扱うか考えてみよう

四～五名のグループに分かれて、グループごとに「命」についての議論を深めました。各グループから、「命をインタープリテーションで扱う場合は、自分が子どもの頃に命とどう向き合っていたかが、大きくかかわってくるのではないか」、「人以外の生き物も擬人化することで自分ごととしてとらえられるのではないか」という意見が出たほか、「生物の世界では成熟した大人とは子孫を残せる状態のことを指すが、人の場合それだけでは判断できない。命の大切さを伝えるのは難しいが大事なこと」、「幼児の段階で命が大事だということをしっかり伝える必要はあるが、それより上の段階では、その大事さがわかってさえいれば細かな段階というのはないのではないか」などの発言がありました。

命というテーマは深く大きいもので、参加者から本当にさまざまな意見やアイデアが出ました。「命は大事」ということをたたきこむのではなく、自分を大事にすることや自分を大事にしてくれる人の存在が、命の大事さを自然に理解していく上で大きな要因となることを感じたワークショップでした。

（報告者：小野　麗佳）

Ⅲ．実施者の所感

今回ワークショップ実施にあたり、テーマを伺って最初に浮かんだのが、「命の中に生も死も両方を同などに含めて、自らの人生の事として受け止めることがまずは大切」という考えです。そして、私ができることは、私が体験してきた人間本来の生まれ方のお話をする、ということでした。そうすれば、単なる「出産話」ではなく、「人が生まれること」が女性にも男性にも一人一人の人生の縮図として、自分ごととして受け止めることができる、そう思ったのです。

ワークショップから約一カ月がたち、参加者の皆さんの中に何が起こり、どんな発酵が進んでいるのかにとても興味があります。できることなら、また集まって熟し具合を分かち合いたいと感じています。

私にとっては、インタープリターという職種の人たちとの初めてのコラボレーションでしたが、人としてのキャパシティの大きさ、職業を通して自分自身と向かい合っている感じ、じっくりと噛み締めて１つ１つの事を味わっている感じに、好感を持ちました。

（実施者：古賀　直子）

生物の「命と死」をインタープリテーションすることについて、環境教育という活動の中で私は、明確な目的や目標の設定、段階的達成の指標等を持つことなく、自分の経験をよりどころにして、いわば勘をはたらかせて実践していました。ある方から、「生物の死」を認知していく発達段階的指標を教えてほしい、という宿題を預かっていた私は、ワークショップという形で、皆さんと一緒に思考を深めたいというのが今回の意図でした。結果はというと、一般的整理には程遠く、やはり参加者の状態に合わせることや、伝える側の生命観や経験がものをいうことが再認識された感を得ましたが、私としては今回の思い巡らしの先で、何らかの整理を進めたい気持ちを強くしました。

（実施者：小林　毅）

ＷＳ２　展示施設でつなぐ

「モノ」から紡ぎ出す“モノがたり”
～モノから記憶をつなぐ～

高橋 真理子（山梨県立科学館）
古瀬 浩史（自然教育研究センター）
重盛 恭一（まち研究所
／ミュージアム エデュケーション センター）

Ⅰ．ワークショップの概要

「学び」というものは、個々の記憶や体験と、新しいことが「つながる」ときに起こるものです。また、人間だけではなく日常生活の「モノ」や「コト」にも歴史や存在意義があります。人、モノ、コト・・・それらの記憶をあらためて引き出すことで、実は「つながっている」ことを発見することがあります。このワークショップでは、自分（人）、クジラに関する展示（モノ）、宇宙や星（コト）の記憶や歴史を引き出し、それらを「つなぐ」ことで、一人一人の気づきが生まれました。

Ⅱ．ワークショップの実施報告

１．モノからつむぐモノ語り　（実施担当：重盛）

このワークショップは、２人１組の活動から始まりました。これは、参加者がお互いの持ち物（小物や服飾品など）にまつわる記憶や思い出を相互にインタビューして、その「持ち物」を展示の形で他の人たちに紹介するものでした。単に、持ち物の脇に解説を添えるだけではなく、インタビューで得た相手の記憶や思い出からイメージした「物語」を大切にして、展示を見た人にその「物語」が届くように、モノの置き方やキャプションの書き方・添え方を工夫しました。完成した後は、参加者全員で鑑賞しました。

２．ぼくとクジラの物語 ―星の海をわたって

（実施担当：高橋）

次に、山梨県立科学館のプラネタリウム番組『ぼくとクジラの物語 ―星の海をわたって』を題材として、「モノとモノのつながり」を発見することの楽しさを味わいました。「星の動きを記録する」という面倒な宿題に取り組んでいた「ぼく」は、突如現れたクジラとともに旅を始めます。その道中で、南の島ポリネシア・ミクロネシアに古くから伝わる航海術では、クジラの星座だけでなく海を泳ぐクジラそのものが目印にされていることを知り、「ぼく」は「星」と「クジラ」との間に「太平洋域」と「神話」という共通点を見いだすのです。「星」と「クジラ」の関係を知った上で、あらためて「ぼく」が「星を見上げる意味」を考えるという物語から、「自分で発見すること」の意味を感じました。

３．クジラの生態　（実施担当：古瀬）

ここではまず、何も参考にしないでクジラの絵を描き、参加者が持っているクジラのイメージを確認しました。参加者の絵の特徴から、クジラといえば「ヒゲクジラ」や「ハクジラ」をイメージしていることが分かり、それを踏まえて、クジラの体の作りや生態を学びました。また、人間がクジラに害を与えていることについても触れました。

４．クジラの「モノがたり」作り

最後に、４人１組に分かれて、クジラと「何か」を関連付けた４枚構成の紙芝居を制作しました。作品には、参加者が持っているクジラに関するイメージや情報などを盛り込みます。約一時間という短い時間でしたが、グループごとに様々なアイディアを出し合い、色鉛筆やクレヨンで色彩豊かな絵を描き、作品作りに取り組みました。クジラの登場する童話『ピノキオ』をアレンジした紙芝居など、完成した紙芝居を披露する発表会を行い、お互いの作品を鑑賞しました。

５．参加者の感想

ワークショップの参加者からは「子どもが自分の日常と照らし合わせて何かしら発見できるような展示の工夫を考えたい」という声や「『ぼくとクジラの物語 ―星の海をわたって』のような作品を作ってみたい」といった感想が聞かれました。

（報告者：大智　友弘）

Ⅲ．実施者の所感

プログラムは、博物館・科学館や環境学習施設で、「モノ」を単に解説するだけでなく、メッセージしたい「世界」につなげるために「物語」を紡ぎ出すことの大切さを共に感じとることを目指しました。導入の「持ち物からミニ展示を創るワーク」は、展示づくりワークショップで行う、「他者紹介」の形式を応用したものですが、ある参加者から「博物館の学芸員はモノを通して他者紹介を繰り返す存在」など、自身の専門性への発見もあったようで、前半の時間をかなり使ったとはいえ、取り込んで正解でした。

成果を４シーンの紙芝居としたのは、「物語る」上での「起承転結」に置き換え易く、時間をかけずにできると考えたからですが、反省は、限られた時間の中で活動を詰め込んだため、終了時間を気にしてハラハラしたことです。しかし、時間をぎりぎりまで使って３チームとも素敵な「ストーリー」を紡ぎ出しました。これは驚きでしたが、元々、参加者がそれぞれの実践現場で、自覚的にも、無自覚にも、「物語る」ことを経験していたからでしょう。参加者の現場での先行経験と今回の経験が合わさって、「世界」へ導く「展示」にとっての「物語」の大切さを「共有」した「学び合いの場」となりました。

（実施者代表：重盛　恭一）

ＷＳ３　食と農でつなぐ

庭先飼育を全国に

実施者：広瀬 敏通（日本エコツーリズムセンター
／ホールアース自然学校）

Ⅰ．ワークショップの概要

日本では現在、食料自給率の低さと農村の過疎化、空洞化が深刻な問題となっています。日本を 100 人の村にたとえると、食糧を作っている人は３人しかいません。このような、「自分で食料を作らない」という状況は、持続可能ではありません。このワークショップでは、持続可能な社会モデルの一つとして、どこでもできて、子どもや高齢者でも取り組める、中小家畜（ヤギ、ニワトリ）の庭先飼育のメリットと利用法が紹介されました。また、後半では「命を食べる体験」として、ニワトリを１羽絞めて、皆でいただきました。

Ⅱ．ワークショップの実施報告

１．庭先飼育の魅力

初めに室内でワークショップ実施者の広瀬さんから、自己紹介とワークショップの概要説明がありました。丈夫で病気にかかりにくくて、子どもやお年寄りが飼育しても危険がない上に、エサは周囲の雑草で賄え、フンは良質な堆肥になるというヤギ飼育の魅力が紹介されました。次に、家庭の残飯や生ゴミをすべて食べてしまうだけでなく、ハエや蚊などの虫も退治してくれるニワトリの優れた点が紹介されました。また、広瀬さん自身が実践されてきた自給自足生活の体験談も紹介されました。ちなみに、家畜化された動物の歴史をみると、ヤギは１万年以上前に家畜としての利用が始まっており、日本でも 40～50 年位前まではたくさんのヤギが飼われていたそうです。ところが、日本では 1961 年の「新・農業基本法」の制定以来、牛・豚・ブロイラー養鶏だけが大規模畜産に向いた家畜として推奨され、それ以外は屠場での受け入れも難しくなって、流通ルートも消えていったそうです。そして、ヤギや羊を飼育していた小規模農家は、法律が変わったために自宅で屠畜を行うことができなくなりました。こうした状況の変化により、1970 年代から日本のヤギの頭数は激減しました。

現在の日本では農村の過疎化が進み、食料自給率は約 40%で先進諸国中、最低レベルとなりました。都道府県別の食料自給率では、北海道や東北は現在でも自給率が高く食料危機にも耐え得る一方で、東京や神奈川、大阪などの都市部では自給率が１～３％と極端に低く、食料危機の際にはとても耐えられそうもないことが数値で示されました。

個人が庭先飼育を通じて農的暮らしに取り組むことは、自分の食料自給率を高めることにつながります。こうした庭先飼育が広がることによって、日本の自給率が多少なりとも向上するかもしれません。

また、ヤギやニワトリを飼うことは、生活と自然のつながりを感じる機会となるので、地域社会の環境にも意識が向きやすくなるのではないでしょうか。

２．ニワトリの命を食べる

参加者の自己紹介は、このワークショップへの参加動機や、飼ったことのある生き物に関するエピソードを交えて行いました。その中には、スーパーで切り身として売られている肉しか見たことがないので、どのような過程を経て精肉されるのかを見てみたい、といったコメントや、「死」が目の前にないので「命を食べる体験」は意外とできない、という私たちの社会状況への言及もありました。自己紹介からは、「実感」や「リアリティー」というキーワードが見えてきました。

参加者の自己紹介が終わると、野外の炊事場に移動してニワトリの屠畜です。まず、ニワトリが逆さに吊るされます。広瀬さんがニワトリを絞める手順を説明して、参加者の中から代表二人が立候補して屠畜の作業に取り掛かりました。他の参加者は、その様子を見守ります。屠畜は、ナイフでニワトリの頸動脈を切って行われました。ニワトリが絶命したら、ロープに吊るしたままの状態で、羽ごと皮をはがして解体していきます。解体されたニワトリの肉を参加者が手分けして精肉していき、ササミや砂肝・レバー・心臓などの可食内臓は、刺身で試食しました。内臓以外の肉は、鉄板の上でカボチャとともに炒め、お弁当と一緒においしくいただきました。

３．参加者の感想

参加者の代表としてニワトリの屠畜を手掛けた方に感想をお聞きしたところ、「ニワトリが温かかったことが印象的だった」、「他の参加者の前で行うので、きちんと作業をしなければいけない、という意識が働いて感情移入しすぎることはなかったので、それが良かったかもしれない」、というコメントをいただきました。可食内臓の刺身を食べた時には、口々においしいという声が聞かれ、また、カボチャと一緒に炒めた肉も大変好評で、あっという間にお腹におさまり、命をいただくありがたさを皆さん実感していました。　（報告者：山口　織枝）

Ⅲ．実施者の所感

「ヤギとニワトリを飼う」庭先飼育は、40 年ほど前までは日本中で当たり前の景色でした。それが何故消えてしまったのかは、ワークショップ参加者にはお話しましたが、ここでは割愛します。というのは、「昔に戻ろう」というメッセージを送りたいからではないからです。むしろ、これからのライフスタイルとして現実的で日常を豊かにしてくれるばかりか、ご近所、地域にまでポジティブな影響を与えてくれるのが、この庭先飼育だというのが、30 年にわたり飼育者であった私の実感です。「どうすればヤギが手に入るの？」「留守はできるの？」そんな疑問にも答えられるような初心者向け《飼育の工夫ネットワーク》のようなものを作りたいと本気で思っています。最後に行ったニワトリの解体と調理は「命を食べる」と題して 20 年以上続けているワークショップですが、「血を見てから鶏肉がダメになった」という人を出さないように、「美味しい！」という実感を必ず持ってもらえる展開にしています。この結果、これまで「肉が食えなくなった」という人はほとんどいません。家畜はペットかと悩む前に、愛らしく役にも立ち、人間との付き合いが 1 万年に及ぶ魅力的で飼いやすい動物にぜひトライしてください。エコカーを買うよりも断然、前向きな暮らしが始まるはずです。　（実施者：広瀬　敏通）

ＷＳ４　メディアと対話でつなぐ

テレビ局は地域のインタープリター　～長崎編～

川廷 昌弘（株式会社 博報堂ＤＹメディアパートナーズ）

協力：テレビ長崎　増田 朋和

Ⅰ．ワークショップの概要

地域に有益な情報を伝え、企業と自治体と生活者をつなぐ役割を果たしているローカルテレビ局を、地域と企業、地域と個人をつなぐ「ステークホルダー・エンゲージメント」のツールとしてとらえ、どのように生かせるかを考えました。

このワークショップでは、テレビ長崎（ＫＴＮ）の協力を得て、長崎県の人々に「つなぐ人フォーラム」の魅力を伝え、参加を呼び掛ける 30 秒ＣＭを制作するための企画と撮影を、参加者とともに行いました。

Ⅱ．ワークショップの実施報告

１．自己紹介

参加者 12 名が２人１組となり、相互インタビューを行いました。インタビューの時間はそれぞれ５分間。質問内容は、このワークショップに参加した理由、現在の活動、居住地の放送エリア、好きなテレビ番組、テレビとのかかわり（出演経験や視聴方法、時間帯）などです。その後、全体に対して相互インタビューのパートナーを１人２分で紹介しました。このパートナー紹介を通じた情報交換の結果、参加者の中にＣＭ出演した経験のある人がいることがわかったほか、参加者同士の意外な共通点の発見もあり、全体の雰囲気が和やかになりました。

２．ワークショップのねらいの共有

今回のワークショップのねらいは、長崎県在住の人々に「つなぐ人フォーラム」への参加を呼び掛ける 30 秒ＣＭを企画、撮影することです。このワークショップで制作したＣＭは、実際にテレビ長崎でオンエアされます。ワークショップの参加者たちは、ＣＭを見たことはあっても作ったことはない人ばかり。そこで、最初に実施者の川廷さんからＣＭ作りの基本について講義がありました。「つなぐ」という視点でとらえると、ローカルテレビ局には主に２つの役割があります。１つ目は、ＣＭという媒体を使って、生活者とスポンサーである企業をつなぐ役割です。２つ目は、消費者や地域社会などのステークホルダーと企業の対話を放送技術により支え、両者をつなぐ役割です。また、ＣＭの企画を立てる際には「ターゲット」「テーマ」「目的」「ゴール（成果）」の４つを設定するなど、ＣＭ制作に関するイロハについて学びました。そして、ＣＭ制作と放映にご協

力いただいたテレビ長崎の増田さんからは、ローカル番組やエコイベントの紹介を通じて、ＣＭ制作のヒントを話していただいたほか、チームマイナス６％のチーム員として、テレビ長崎の取り組みをご紹介いただきました。

３．30 秒ＣＭの企画作り

４人１組のグループ（合計３グループ）に分かれて、30 秒ＣＭの企画会議が始まりました。企画会議では、ＣＭで必要な映像を説明する４コマからなる絵コンテと、ナレーション原稿を書き上げる作業に取り組みました。長崎県の皆さんに「つなぐ人フォーラム」をどのように伝えれば良いのか、各グループで一人ずつ意見を述べながらＣＭの方向性を決めていきます。時には、実施者からのアドバイスが出され、また、企画で行き詰ったグループからは助言を求める声も上がり、各グループともＣＭ制作に熱が入っていました。「つなぐ人フォーラム」の内容紹介をＣＭのコンセプトとして採用したグループや、富士山や八ヶ岳などの清里をとりまく風景を撮影のロケ地に設定するグループ、段ボールやペンを使ってオリジナルの小道具を作りＣＭ演出にこだわりを見せるグループなど、内容はさまざまです。各グループが長崎県の皆さんに「つなぐ人フォーラム」への参加をどのようにＰＲしていくか試行錯誤する姿があちこちで見られました。

４．ＣＭの撮影

ＣＭの絵コンテとナレーション原稿が完成したグループから順番に、ＣＭの素材となる映像をテレビ長崎の増田さんに撮影していただきました。清里の自然を背景にしたシーンや、「つなぐ」をイメージして手をつないだシーン、各グループの撮影はワークショップの終了時間ギリギリまで続きました。撮影を終了した達成感は大きかったようで、出来上がりを楽しみにしている声が口々に聞かれました。

（報告者：李　厚槿）

Ⅲ．実施者の所感

ステークホルダー・エンゲージメントを地方テレビ局が担うという事を実感してもらうワークショップの第１弾。

地域コミュニティのつなぎ手ではありますが、様々な制約がある放送局をいかに活用するか、それにはメディアリテラシーも養わなければという事で、実際にＣＭを作ることで作り手の事情を実感してもらおうという３時間半でした。ＣＭのコンテンツは「つなぐ人フォーラム」そのもの。参加者の皆さんはこのイベントがどんなものか分かっているはずですが、ＣＭの対象者は「つなぐ人フォーラム」のことを実際に見たことも聞いたこともない人。しかも相手の顔は見えません。でも潜在的に、このイベントに共感できる精神を持った長崎の人にどうつながるか、まさにつなぐ技術が問われる仕組みになっています。

３時間半という普通では考えられない制約も、放送局の宿命である時間との戦いもエッセンスの１つ。チームプレゼンはできませんでしたが、見事３チームとも収録まで完了。僕も初めての試みでしたが、皆さん楽しんでくださったのが成功の秘訣。そして、テレビ長崎の増田さんの奉仕の精神溢れる対応に涙。感謝！後日フォーラム紹介番組を放送、制作したＣＭも１本オンエアされました！

（実施者：川廷　昌弘）

ＷＳ５　地域でつなぐ

イノバティブ・コミュニティってなんだろう？
～持続性と革新性を「つなぐ人」の役割を考える～

実施者：嵯峨 創平（NPO 法人 環境文化のための対話研究所
／ミュージアム・シアター・ワークショップ）
平田 裕之（地球環境パートナーシッププラザ）
／企業と NPO のパートナーシップ事業担当）

Ⅰ．ワークショップの概要

国連大学と地球環境パートナーシッププラザ（以下、GEIC）が共同で進めてきた「イノバティブ・コミュニティ」の考え方に基づいて、環境省が 2009 年度に実施している「事業型環境ＮＰＯ・社会的企業中間支援サポート事業」の対象となっている棚田オーナー制度事業を題材としたワークショップです。

ワークショップに先立ち、棚田オーナー制度事業の概要と課題の紹介に加え、棚田オーナー制度事業が抱える課題と共通する背景を持つ、福島県奥会津でのエコミュージアム活動の取り組みについても事例が紹介されました。

２つの事例について学んだ上でグループに分かれ、棚田トラスト事業の「棚田の保全活用問題」に取り組みました。課題に対して問いを立てることは、地域にどのような課題があるのかを整理することであり、課題を整理することは事業を円滑に進める方法の１つである、という考え方に沿ってワークショップが展開していきました。

Ⅱ．ワークショップの実施報告

１．自己紹介と課題の共有

最初に輪になって自己紹介をしました。このワークショップでは「地域」を取り扱うので、自己紹介では名前に加えて、自分が携わっている地域または関係のある地域についての紹介もしていきました。次に平田氏から地域の持続性についてのプレゼンテーションがありました。その中では、地域の持続性の現状や、パートナーシップによって生み出された新しい価値の事例、ソーシャルキャピタル、地域におけるイノベーションなどの説明がありました。その後、「事業型環境ＮＰＯ・社会的企業中間支援サポート事業」の紹介があり、ソーシャル・ビジネスで利益をあげつつ課題を解決するには難しさがあることを学びました。その後、ワークショップの題材となる棚田保全事業に関するプレゼンテーションが行われました。「棚田資源マップ」などを見ながら、この棚田保全事業を自分の問題としてとらえるために質疑応答が行われました。質疑応答では「アクセス

しやすいのか」、「この事業があまりにも進んでいないのに驚いた」、「文字資料だけだが、地図や写真はないのか」、「水俣の地元学とイノバティブの違いは何か」などの質問が出ました。

ここで参考事例として、棚田保全事業が抱える問題と重なる背景を持つ、福島県奥会津でのエコミュージアム活動の取り組みと、活動に対する外部者の関わり方について、嵯峨氏から紹介がありました。この事例紹介を聞いた後に参加者から出された、「革新性とは、常識を疑うことではないだろうか」という意見が印象的でした。

２．昼食

当日は天気がよかったので、奥会津の事例紹介が終わってから全員でテラスに出てお弁当を食べました。午前の感想等を話しながらの昼食となりました。

３．問いを立てて整理する

午後は、実施者から棚田の問題に対して「どのような問いを立てて、問題をどう整理するか」という課題が与えられます。その課題に対して４～５人で話し合うグループワークを行いました。グループワークの後は、グループ毎に立てた問いと、その問いを立てた理由の発表です。グループ発表では、「棚田に愛を！！」、「棚田が必要だというコンセンサスをとるには？」、「地元の人の間で棚田の保全を本当にやりたいかなどの合意をどうやってするか？」という問いが出されました。また、棚田だけでなく他の観光資源も一緒に活用する、年配者と子どもたちが関われる寄り合いの場を作って知恵の継承をする、などのアイデアも出されました。

まとめとして、どういう問題があるかを認識するためには「問い」を立てることが大切で、関わっている人が「つなぐ人」として、どのような役割を果たしていくかについて考えていくことが重要であると実施者から話があり、ワークショップが終了しました。

（報告者：藤川　千里）

Ⅲ．実施者の所感

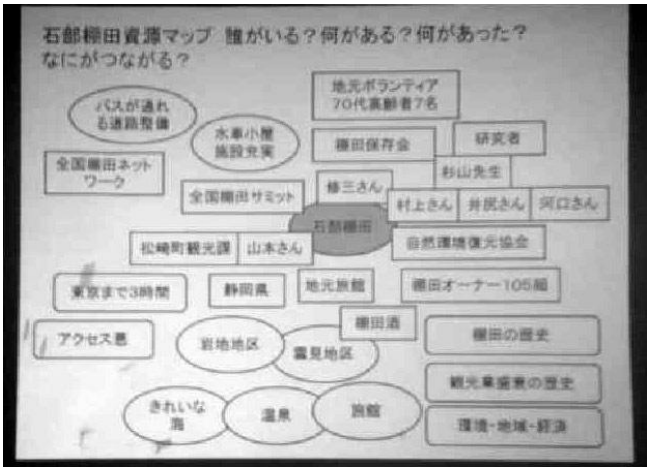
「つなぐ人」というテーマにからめて、地域内のさまざまな主体をつなぎ、過去の経緯と未来への構想をつなぐための「問いの立て方／課題の立て方」を学習課題としてワークショップを進めました。

地域づくりの現場では、問題はあらかじめ整理されている場合でも、（真の問題を把握するためにも）自分の目と足で実情を把握した上で、適切な「問い」や「課題」を立てて地域の人々と共有することが重要です。この作業を誤ると、活動の目的共有や参加意識が大きくブレることになります。その後の段階でも、「コミュニティ・ファシリテーション」の課題はいろいろありますが、今回は入り口段階で最も大切なポイントを、参加者とともに深めることができました。

（実施者：嵯峨　創平）

「革新性とは常識を疑うこと」という意見と、今回の「問いをたてる」というテーマは、非常に密接にかかわっていることを改めて実感できました。特に現場での活動は様々な情報で混乱しがちですが、つなぐ人自らが『迷子』にならないよう「問い」や「課題」というコンパスを持っていることが重要だと認識できました。

（実施者：平田　裕之）



ＷＳ６　旅でつなぐ

地域と人をつなぐ、人と人をつなぐ
～旅のチカラ～

実施者：中垣 真紀子（日本エコツーリズムセンター）

Ⅰ．ワークショップ概要

旅をしない人はいません。仕事でもなく、誰かに命じられるわけでもないのに、人は旅に出ます。それも古の昔から。「可愛い子には旅をさせよ」、「旅は道連れ、世は情け」など、旅が人にもたらす不思議な力を昔から言い伝える言葉も多くあります。

でも今は、旅といえば“”観光旅行”と言い換えられ、「旅のチカラ」に出会えないままに終わってしまう人もいます。

旅とは一体なんなのか？　どんな力を持っているのか？　どうすれば「旅のチカラ」を感じることができるのか？　こうしたことを切り口に、旅について参加者と一緒に考えました。

Ⅱ．ワークショップの実施報告

１．参加者自己紹介

「旅の中で何かとつながったことは？」、「あなたにとっての旅とは？」をテーマに、参加者の自己紹介を行いました。10 名の参加者から、「旅で臆病な自分に気づいた」、「出会いとつながりを大事にしている」、「旅先での人との会話を楽しみにしている」、「無計画を計画して旅をしている」などのさまざまな旅が紹介されました。

２．旅とは？～実施者自己紹介から～

実施者の中垣さんがスライドショーで写真を上映しながら、自らの旅について語りました。16 歳で留学してホストファミリーとまるで家族同然の付き合いをしたほか、バルセロナの大学に進み、日本へ帰ってきた後もいろいろな国で旅を重ねて、さまざまな刺激を受けてきたそうです。例えば、南国で大きなナタのようなナイフでヤシの実を割って売る少年に出会い、日本のナイフ所持の常識がおかしいことに気づいたり、オーストラリアで圧倒的な自然と出会い、これまでとは違う価値観を新しく持つことになったりしたお話を伺うことができました。

旅はチャレンジスピリッツをかきたてられるもの、自分が変わるものだと中垣さんは言います。

３．グループディスカッション１
～つながる旅、つながらない旅～

４～５人のグループに分かれ「つながる旅、つながらない旅とはどういうものか」についてディスカッションしました。

ディスカッションで出てきたつながる旅とは、非日常であり異文化に出会う旅、旅先の住人やさまざまな出会いから素の自分が出てくる旅、心のつなが

りが芽生える旅、などでした。

また、つながらない旅とは、見えているものを見ていない旅、会話がなく土地の人と話さない旅、自分の殻を破らない旅、などが意見として出ました。そして、このようなつながらない旅は、簡単に旅ができるようになった現代になって生まれてきたものなのではないかという話になりました。

つながる旅をすることにより、大事に思う人や場ができるということが、旅が人を惹きつける魅力の１つなのかもしれません。

４．グループディスカッション２
～旅に社会を変える力はあるのか～

グループを変えて、今度は「旅に社会を変える力はあるのか」をテーマにディスカッションを行いました。

近年、地方の芸術祭が盛り上がっているほか、今まで地域にとってデメリットだと考えられてきた雪かきや地吹雪などを体験するツアーに人気が出ています。こうした例をみると、旅を企画する側がメッセージ性を持つことで、旅が社会を変える力になるのではないかという意見が出ました。

また、旅には異文化との出会いという側面があります。旅を通じて生まれた異文化との出会いが、相互理解の機会となれば、敵対意識を生まずに平和意識を作ることにつながるだろうという意見が出され、つながる旅には平和な社会を作るチカラがあるのではないか、と参加者の意見が一致してワークショップ終了となりました。

（報告者：小野　麗佳）

Ⅲ．実施者の所感

私がエコツーリズムを普及したい、仕事にしたい、と思ったのは旅がきっかけでした。都会に育ち、自然がどういうものかまるで知らずにいたことに気づいたのは、コスタリカへ旅した時でした。コスタリカでは、自然の中で過ごすことにより、心が穏やかになり、自然と感謝の気持ちや愛でる気持ちが生まれてくることに気づきました。そういう思いを、殺伐としてきた日本の社会で育つ子どもたちにも感じてもらい、感謝や愛の心を育んで欲しいと強く思ったのです。その後も旅を通して自分が成長し、その成長が平和な社会を築くための行動への原動力となっています。

好きな場所、もの、人が増えていくことで、争うのではなく、それらを大切に思うことができるようになる･･･単なる楽しみだけに終わらない、社会を変えるチカラをも生む「旅のチカラ」を確認し、認識する良い機会になったと思います。

（実施者：中垣　真紀子）

ＷＳ７　メディアと対話でつなぐ

対話から学ぶ　～ステークホルダー・エンゲージメント・ワークショップを体験しよう～

実施者：中西 紹一（プラス・サーキュレーション・ジャパン／立教大学）
川嶋 直（キープ協会／立教大学）

Ⅰ．ワークショップの概要

2010年後半に予定されているISO26000の発効で、ステークホルダーとの対話を軸とした「ステークホルダー・エンゲージメント」は、企業の社会的責任を遂行する上で重要な位置を占めることになります。しかし、その具体的な手法に対する疑問や課題は、企業側にとって大きな悩みの種に違いありません。

このワークショップでは、「ステークホルダー・エンゲージメント」に求められる対話のデザインや、企業や市民団体による「ステークホルダー・エンゲージメント」の実践的な場についてディスカッションしました。

Ⅱ．ワークショップの実施報告

１．どんな人が来ているのか
～「グー・チョキ・パー」アンケート～

最初にアイスブレイクを兼ねて、今日のワークショップに関わる４つのキーワードの認知度について聞く「グー・チョキ・パー」アンケートを行いました。これは、「ＣＳＲ」、「ステークホルダー・ダイアログ」、「ステークホルダー・エンゲージメント」、「ISO26000」の４つのキーワードそれぞれについて、「グー（全く知らない）・チョキ（ちょっと知っている）・パー（他人に説明できるほどに知っている）」で答えるアンケートです。

その結果、「ＣＳＲ」を知っている人が多い一方、「ステークホルダー・ダイアログ」、「ステークホルダー・エンゲージメント」、「ISO26000」に関しては半分以上がまったく知らず、それらの用語があまり浸透していないことも明らかになりました。

２．ステークホルダー・エンゲージメントとは

ステークホルダー・エンゲージメントとは、「組織が社会的責任を果たしていく過程においてステークホルダー（利害関係者）を理解し、さらには相互に実現可能な成果を達成するために、対話などを通じてステークホルダーと積極的に関わり合うこと」と定義され、2010年に発効されるISO26000において重要視されています。これは、企業の意思決定に際して多様なステークホルダーとの間に対話の機会を生み出し、対話という「フラットな関係」の中でのコミュニケーションを通じて社会づくりを推進していくものです。

ステークホルダー・エンゲージメントについての

解説を聞いた後に、ワークを行いました。まず、「私は○○（人）と○○（事）について語り合い、その結果、○○（成果）になった」という形式で、参加者自身の経験に基づいて対話の成功・失敗事例を挙げてもらいます。その後、６人１組になってその事例を共有し、対話がうまくいった理由とうまくいかなかった理由を議論しました。その結果、対話する際の重要な点として「ビジョンやスタンスの共有」や「実践的な場の設定」などが挙げられました。

３．ステークホルダー・エンゲージメントの実践的ディスカッション

最後に、参加者が３つのグループに分かれ、企業や市民団体がステークホルダー・エンゲージメントを通じて、まちづくりに貢献できる可能性についてディスカッションしました。２つのグループには、浄土宗に所属している人が各２名いたことから、ステークホルダーとの対話を通じて、浄土宗の活性化と町づくりへの貢献の可能性を同時に見いだす方法を議論してもらい、残りの１グループには人の住んでいない土地の大規模開発を推進している企業として、ステークホルダーとの対話を通じて、ネットワークづくりと町づくりに貢献する方法を議論してもらいました。

浄土宗の活性化と町づくりについて話し合ったチームからは、樹木葬による里山保全、大径木を育てる森づくりなどが挙げられました。また、大規模開発を推進する企業について話し合ったチームからは、日本陸上競技連盟と共同してランニングやサイクリングの専用道路を創設したり、メディアや芸能人と提携した教育活動を行ったりするなどのアイデアが出され、多様なステークホルダーが町づくりの課題について対話できる場づくりの重要性が主張されました。ディスカッション後には、「異なる背景の人との対話は、理想的な町づくりにつながることが実感できた」という声が、参加者から聞かれました。

（報告者：大智　友裕）

Ⅲ．実施者の所感

ワークショップを実施して、私にとっての学び・気づきが２点あった。第１点として、ステークホルダー・エンゲージメントは抽象的かつ実態の見えにくい概念であるため、理解や浸透には時間がかかるだろう、という点。逆に言えば、時間をかけ、ワークショップなどの対話の場を設けることが、なによりも重要だという点を再認識した。

２つめの気づきは、実践的ディスカッションの中で、伝統宗教のネットワークや、地域開発を推進するディベロッパーなど、これまで持続可能な社会への貢献という側面で、あまり目立たなかった組織にとって、社会貢献の方向性を顕在化させるステークホルダー・エンゲージメントは非常に有効だという点だ。例えば、浄土宗は現在 7,000 の寺院をネットワークしているという。社会貢献活動を推進する際にも、このネットワークを有効活用することは、社会にとっても、浄土宗にとってもメリットは大きい、という意見が交わされていた。また、ディベロッパーにとっては、地域開発事業そのものがステークホルダー・エンゲージメントである、という意見も登場していた。つまり、ステークホルダー内にある「隠れた社会資産」を顕在化させる手法として、ステークホルダー・エンゲージメントは非常に有効な側面を有しているのではないか。

今振り返ると、大いなる気づきに溢れたワークショップだった。参加者の皆さまには感謝申し上げたい。　（実施者：中西　紹一）

ＷＳ８　野外活動でつなぐ

安全管理から危機管理へと意識を広げるワークショップ

実施者:佐藤 初雄（自然体験活動推進協議会／国際自然大学校）
町頭 隆児（有限会社 オフィステラ）

Ⅰ．ワークショップの概要

自然体験活動を行うにあたり、事故をいかになくしていくかは重要な課題です。自然の中での活動に限らず、博物館やビジターセンターなどの施設でも、利用者の安全を確保するために、さまざまな危険を予測しコントロールすることが求められます。このワークショップでは、野外での様々な活動を行うにあたり、いかにリスクをコントロールし、マネジメントするか、また実際に事故が起こったときのマスコミ対策や情報の取り扱いなどについて、講義や話し合いが行われました。

Ⅱ．ワークショップの実施報告

１．自己紹介

このワークショップには、自然学校だけではなくさまざまな機関や団体に所属している方々が集まりました。まず、四つ折りにした紙の各マスに、①所属と名前、②組織における役割、③自分が安全管理に関わる度合いや意識レベル、④このワークショップで持ち帰りたいもの、を書きこみ１人ずつ発表しました。

２．安全管理の基本的な考え方

自己紹介が終わった後は、実施者の佐藤さんから、野外活動の安全管理について、全般的なお話しがありました。はじめに、安全管理のためのポイントとして、①安全管理マニュアルの作成、②スタッフトレーニングの実施と記録、③保険への加入、の３点が紹介されました。中でも、安全管理マニュアルを使ってスタッフトレーニングを行い、実施した日時と内容を記録として残すことの重要性が強調されました。これは、万一訴訟になった際、実施者を守る上で大きな役割を果たします。また、事故が起こった時に備えて保険に加入するだけでなく、加入している保険の内容を把握しておくことも重要とのことでした。

以上のような事柄が重要性を増してきた背景として、活動参加者の自然体験に対する経験不足と、訴訟社会の進展、安全対策が対処から予防へと変わってきたことなどが挙げられるそうです。そして、安全管理上、忘れてならないキーワードは「自分の身は自分で守る」で、参加者１人１人が安全への意識を持つことが事故を防ぐ有効な対策になります。

事故を未然に防ぐための具体的な行動としては、プログラムを実施する中心スタッフ２名以上による実地踏査、天候チェック、活動前の参加者に対するセイフティトーク（安全への意識付け）の実施、の３点が挙げられました。

３．リスクコントロールと危機管理

もう１人の実施者である町頭さんからは、保険の観点から法律的なことも含めてお話しがありました。

はじめに、「事故は起こるもの」という気持ちが指導者にある限り事故は減らないというお話があり、「事故ゼロ」の意識改革の重要性が指摘されました。

次に、リスクコントロールにあたって重要な、回避・防災・軽減の３つについて解説がありました。「回避」とは当初予定していた活動をキャンセルすること、「防災」とは安全管理マニュアルの作成・見直しやスタッフのトレーニング、「軽減」とはプログラム内容や場所の変更で、こうした要素を組み合わせてリスクをコントロールしていきます。また、実際に危機に面してしまったとき、どのように対応すべきか、またどのようにすればリスクが軽減できるかについて、具体的な事例を挙げながら解説していただきました。

４．まとめ

事故が起こったときには、謝罪を怠らないことのほか、訴訟という最悪の事態を避けるために、プログラム参加者（被害者）やその家族（遺族）には事故後の経過報告などの連絡を密にとり、信頼関係を築く努力が欠かせないこと、メディア対策では情報を隠すのではなく開示することが、事態の悪化を避ける上で不可欠である点などが確認されました。

最後に質疑応答と意見交換が行われ、施設来訪者やプログラムの参加者がけがをしたときの対応方法などについて、参加者間で情報を共有しました。また各団体に、安全管理に関する情報の蓄積・管理や、スタッフのトレーニングを担う「リスクマネージャー」を置く必要性、団体間の情報共有を進めデータ分析による事故の傾向を把握していく有効性についても今後の課題として提示され、ワークショップ終了となりました。　　（報告者：山口　織枝）

Ⅲ．実施者の所感

安全管理は最近クローズアップされており、事業を実施する者にとっては、避けては通れない最も重要なテーマの１つです。しかも、その範囲はどんどんと拡大され、情報管理、災害対策などといったことまで管理しなければならなくなりました。今後もますます範囲は広がっていくものと予想されます。

しかしながら、こうした分野まで、きちんと管理されている団体、組織は、まだまだ少ないと言わざるを得ません。そこで、これからは、こうした情報や研修会を通して、常に、団体や組織に意識してもらえるような機会をできるだけ用意していく必要があると思います。

安全管理の最も重要なことの１つは、知識や情報を持っているだけでなく、そのことを実施し、常にチェックすることだといえます。しかし、何かをすることによって安心してしまい、事故を起こしては元も子もありません。

安全管理には、これで終わり、ということはないのです。事業や組織を、継続していく限りにおいては、未来永劫の課題なのです。こうした意識を、事業にかかわるすべてのスタッフに意識化することが大切です。

是非、「事故ゼロの意識」を徹底させましょう。

（実施者代表：佐藤　初雄）

ＷＳ９　メディアと対話でつなぐ

テレビ局は地域のインタープリター　～山梨編～

川廷 昌弘（株式会社 博報堂ＤＹメディアパートナーズ）
高橋 真理子（山梨県立科学館）
協力：山梨放送　荻野 弘樹

Ⅰ．ワークショップの概要

このワークショップでは、「地域に有益な情報を伝える」、「企業と自治体と生活者をつなぐ」といった役割を果たしているローカルテレビ局を、地域と企業、地域と個人をつなぐ「ステークホルダー・エンゲージメント」のツールとして位置づけています。

山梨放送の協力を得て、「つなぐ人フォーラム」をＰＲする３０分番組を、ドキュメントまたは情報バラエティーとして企画して、その発表を通じて番組化への検討を行いました。

Ⅱ．ワークショップの実施報告

１．自己紹介

参加者８名が２人１組となり、相互インタビューを行いました。インタビュー時間はそれぞれ７分間。質問内容は、このワークショップに参加した理由、現在の活動、居住地の放送エリア、好きなテレビ番組、テレビとの関わり（出演経験や視聴方法、時間帯）などです。その後、全体に対して相互インタビューのパートナーを１人２分で紹介しました。参加者には、大学生や動物園、図書館職員、助産師、会社員なさまざまな職種の方がいて楽しい相互紹介となり、会場には大きな笑い声が響いていました。

２．ワークショップの目的

今回のワークショップの目的は、山梨放送で放送する「つなぐ人フォーラム」の 30 分番組を企画することです。番組企画に初めて挑戦する参加者に対して、実施者チームから番組企画の基本に関する講義がありました。ＣＭやテレビ番組は、テレビ局やスポンサーと消費者のつなぎ役を担っていることや、テレビ局は放送技術によって消費者や地域社会などのステークホルダーと企業の対話を支え、両者のつなぎ役となっていることなどが、パワーポイントや図を用いて解説されました。

山梨放送の制作ディレクター　荻野さんからは、山梨放送の人気番組「ともちゃん家の５時」の番組紹介がありました。また、山梨県とゆかりのある有名人を起用した場合の番組タイトルやストーリー展開などの具体例を交えながら、番組企画に役立つポイントについての解説もあり、参加者はしきりにうなずきながら一生懸命メモを取っていました。

３．30 分番組の企画作り

参加者が番組企画の基本を理解したところで、ＡチームとＢチーム（各４人）に分かれ、企画会議が始まりました。ポストイットに番組作りのキーワードを書き出して内容を整理したり、欲しい映像の場面をＡ４サイズの紙に書いた「箱書き」を並べて番組の構成を考えたりと、各班少しずつ番組の企画を進めていきました。出来上がった企画は、各チームがそれぞれ模造紙にまとめて、最後に全体で企画内容の発表を行いました。

□Ａチーム

音楽や食、アートなどのワークショップを通じて、新しい清里ブランドを発掘していくという「第３回つなぐ人フォーラム（2010 年実施予定)」のコンセプトを提案した上で、それを伝える番組企画を発表しました。この企画では、「つなぐ人フォーラム」の一連の流れを追っていきます。そこに、実行委員長が語るフォーラムの歩みやねらいのほか、参加者から聞いた参加前後の感想や、各ワークショップの内容などを織り交ぜます。「つなぐ人フォーラム」の魅力を前面に押し出すことにより、新しい清里ブランドを発掘していこう、という内容となりました。

□Ｂチーム

「つなぐ人フォーラム」のことを知らない人たちを対象に、フォーラムへの参加を呼び掛ける番組企画でした。今回、初めてフォーラムに参加した人からワークショップに参加した感想を話してもらい、また、ワークショップの実施者には実施したワークショップの内容について解説をしてもらいます。このほか、清里やキープ協会を紹介する映像や、フォーラム初参加者と実行委員との対話、初参加者のその後の追跡なども盛り込んだドキュメント番組となりました。

両チームの発表終了後、山梨放送の制作ディレクター　荻野さんから、とても良い企画で面白かったと講評があり、もしかすると番組の放映が実現するかもしれないという期待を感じながらワークショップが終了しました。

（報告者：李　厚槿）

Ⅲ．実施者の所感

ステークホルダー・エンゲージメントを地方テレビ局が担う、という事を実感してもらうワークショップの第二弾。

今回は、番組として仕立てることを前提としてみました。そこで地元山梨で地域資産の掘り起こしに奔走する山梨放送の制作ディレクターである荻野さんに来ていただき、この「つなぐ人フォーラム」も荻野さんの取材対象であることを前提に、来年のイベントを特別番組に仕立てて放送するための企画書を作ってみようという形にしてみました。「つなぐ人」を山梨の資産として山梨の視聴者にどうやって伝えるのか。「箱書き」と称する方法論で 30 分の番組構成を考えてもらいました。しかし、現状の「つなぐ人フォーラム」は、30 分番組のコンテンツとしては魅力が足りないという考えと、１人の視点を使ってより掘り下げれば伝わるのではないかという考えの二方向に分かれ、「つなぐ人フォーラム」そのものを見つめ直すというねらい通りの良い掘り下げができました。多忙の中を駆けつけてくれた荻野さん、その荻野さんを粘り強く口説き落としてくださった高橋さん、皆さんのご協力の賜物で楽しく意義深いワークショップが実現しました。もちろん参加してくださった方々の熱意ある取組みにより、ワークショップが充実したことは言うまでもありません。

感謝！

（実施者：川廷　昌弘）

ＷＳ１０　デザインでつなぐ

デザイン教育は参考になるか？

実施者：西村 佳哲（リビングワールド
／全国教育系ワークショップフォーラム）

Ⅰ．ワークショップの概要

最も基本的なデザイン力は、ものごとに施されているデザインに気づく力です。このワークショップでは、デザインに気づく力を養うために「観察」に焦点を当てました。「観察する」とはどういうことか、これを体験するために漫画を模写したほか、小物や持ち物を観察してモノが語りかけているメッセージを感じとる体験をしました。観察を通じて透明化された優れたデザインに気づき、どのようにデザインが作られているかを学び、観察を通じて感じたことを互いに語り合いました。

Ⅱ．ワークショップの実施報告

１．自己紹介と導入のお話し

始めに、輪になって自己紹介と今の気分について話していきました。その後、実施者の西村氏から大学でのデザイン教育の現状と、デザイン教育に必要なことについての説明がありました。デザイン教育の現場では、製品というアウトプットしたモノに焦点が当てられがちですが、実は、アウトプットするためにはインプットが必要で、インプットするためには「観察」することが大事になります。この西村氏の話を聞いてどう感じたかについても、参加者同士で話し合いました。

２．「観察」を体験する

次に、「観察」を体験するために、大友克洋氏の漫画『AKIRA』の２ページ分を 40 分間で模写しました。西村氏は、今回の模写は正確に写すことではなく、漫画に施されているつくりや流れを捉えることが目的であり、「観察して気になったこと、気づいたことをその場面に描き込んで欲しい」と伝えました。模写の時間は当初 30 分の予定でしたが、熱心に取り組む参加者の様子から 10 分延長して、気づいたことを描き込む時間を増やしました。

模写が終わると、３人１組になってめいめいが気づいたことを報告し合いました。その中で「描いて初めて気づいた」と模写することによって作者の工夫や意図に気づくことができた、という感想も聞かれました。その後、西村氏から模写した『AKIRA』に込められたデザインの技法や工夫について解説があり、メディア特性をしっかりと捉えているデザインや表現は、人をその経験と一体化し、透明になる、ということが述べられました。例えば紙というメディアの特性は、必ず裏と表があることで、映画のチラシはそれをとてもよく踏まえて作られているということ。漫画では、ページ上の情報を追う人間の目の動きがポイントになってくることが、具体的な例

を引き合いにして語られました。解説が終わると、３人１組で解説を聞いて感じたことや気づいたことをお互いにシェアしました。そこでは「見えているものが少ない」ことへの気づきや、「感受性、センス」というキーワードなど、参加者それぞれの発見が共有されたようです。また、模写に関しては「自分の感覚では４～５分なのに、15 分経っていた」と時間の感覚の違いに驚いた参加者もいました。

模写を体験した後、プロダクト（製品）を見る体験をしました。置時計、フォークなど日常にある製品を眺めます。モノを見ていく時は部品数や製造工程など、つくり手の意図に着目すると、見えなかったものが見えてきます。様々なサンプルを並べながら、西村氏は「観察とは、観て・察することである」と。また、「デザインという仕事はモノではなく、モノを通じて得られる経験をつくっているんです」と述べていました。

いろいろな参考例を見た後、それぞれが自分の手荷物の中にデザインを探し、発見したつくりや工夫について、３人１組で報告し合いました。西村氏からは、モノをみる「解像度が上がると楽しくなる」、「モノを通じて人と触れ合うことができる」など、観察する面白さが語られました。

３．まとめ

最後に、ワークショップが自分にとってどのような点で参考になったかを、３人１組で報告しました。そこでは、「モノを作ることはできないから、作れる人をサポートして、つなげる人になりたい」とつなぐ人の視点から意見を述べた参加者もいました。

最後に輪となり、1 人 30 秒を目安にワークショップに参加して感じたことをシェアしました。その中では、「モノのデザインにはいろいろなことが隠されている」、「モノづくりは体験づくりだという言葉が身にしみた」、「物事の見方を変えること、また知ることで、人生が豊かになると思った」などの感想が出されました。

（報告者：藤川　千里）

Ⅲ．実施者の所感

普段、美術大学のデザイン科で行っている「デザイン・アウェアネス（デザインへの気づき）」という体験型の授業を、ほぼそのまま再現しました。参加者の領域は様々で、企画やコーディネイトの仕事に携わっている人もいれば、野外や博物館などでインタープリテーション（解説・橋渡し）の仕事に従事している人も多くいらっしゃいました。

デザインは人為であって、自然ではありません。無意識が形づくるディティールもなくはありませんが、基本的には意志や意図を持って行われる営みです。しかしよく出来ているものであればあるほど、その仕事は見えにくくなります。使う人がストレートに経験と一体化するためです。例えばペットボトルのキャップがとても良くデザインされているという事実に、気づいたり、意識したりする人は少ないでしょう。そこを「握って」「ひねればいい」ことは考えるまでもなく解るし、行為は極めてナチュラルに達成に至ります。デザインを学ぶためには、スルスルと達成出来てしまう日々の経験の中で、自らからブレーキを踏み、細部に施されているデザインに気づく努力が必要なのです。

さて野外であれ館内であれ、自然のインタープリテーションに従事する人たちにこの授業が参考になるかというと、実は甚だ疑問ではあります。「観察」という二文字が重要であることは誰もが了解できると思いますが、自然現象には、理はあっても意図はありません。インタープリテーションは自然のメッセージを伝える解説者であると言う人がいますが、自然はメッセージなど発していないと思うのです。そこにメッセージを読み取っているのは人間であって、その人の自然観や世界観の投影や解釈に過ぎないのではないか？…、という話はしませんでした。参加者はそれぞれ得るものを持ち帰ってくれたようですが、もう少し話し合える時間が欲しかったなと、ふり返って思います。

（実施者：西村　佳哲）

プレゼンテーション／ワークショップなどタイトル一覧

◆ 第１日目

◇アジアの事例報告

アジアからのゲストによる、それぞれの施設・現場の活動紹介がありました。

＜テーマと発表者＞（以下、敬称略）

・中国における環境インタープリテーションおよび“環境教育基地”の発展についての概論　発表者：曾　紅鷹
・韓国の環境教育と解説家（インタープリター）の現状　発表者：ジョン・ビョンジュン
・コミュニティ、自然、地方の知恵のつながりを通した市民社会の確立（インドネシア）　発表者：フェリ・プリハントロ
・マレーシア・サバ州における環境インタープリテーション　発表者：ベルナデット・ジョーマン
・台湾のインタープリテーションの傾向: 市民参加の観点から　発表者：周　儒、林　慧年

◇10 分プレゼンテーション

参加者の皆さんから、事前に紹介したい事例などを募集してプレゼンテーションを行いました。

＜テーマと発表者＞（以下、敬称略）

・記憶とモノ～語られること、それをつなぐこと:ベガ委員会の活動から～　発表者:重盛　恭一
・見える・つながる・環境情報～ポータルサイトの取組み　発表者：杉盛　啓明
・ラジオと星で人をつなぐ～山梨産ほしひかりの試み　発表者：跡部　浩一
・自然体験普及のために、一民間企業ができることは、果たしてあるのか教えて頂けないでしょうか？　発表者：大島　伸一
・森の危険な生き物　発表者：原田　けいこ
・みんぱくミュージアムパートナーズ（MMP）の活動　発表者：五月女　賢司
・インタープリテーションにおける「へぇ～」と「ほぉ～」について　発表者：田中　広樹
・体験交流員のお仕事紹介　発表者：島　絵里子
・自然と人をつなぐ　丹沢の自然再生　発表者：吉田　直哉
・新潟市水族館での「つなぐ」こころみ　発表者：大和　淳
・安い素材で格好よく見せるハンズオン展示　発表者：奇二　正彦

◆ 第２日目

◇ワークショップ

様々な観点から「つなぐ」を考えるワークショップ（以下、ＷＳ）が、午前と午後に５つずつ実施されました。

各ＷＳの報告は、Ｐ．20～39 に掲載しています。

＜テーマと実施者＞（以下、敬称略）

１．命をつなぐ～命をインタープリテーションする～　実施者：小林　毅、古賀　直子
２．「モノ」から紡ぎ出す“モノがたり”～モノから記憶をつなぐ～　実施者：高橋　真理子、古瀬　浩史、重盛　恭一
３．庭先飼育を全国に　実施者：広瀬　敏通
４．テレビ局は地域のインタープリター～長崎編～　実施者：川廷　昌弘、増田　朋和
５．イノバティブ・コミュニティってなんだろう？～持続性と革新性を「つなぐ人」の役割を考える～　実施者：嵯峨　創平、平田　裕之
６．地域と人をつなぐ、人と人をつなぐ～旅のチカラ～　実施者：中垣　真紀子
７．対話から学ぶ～ステークホルダー・エンゲージメント・ワークショップを体験しよう～　実施者：中西　紹一、川嶋　直
８．安全管理から危機管理へと意識を広げる　実施者：佐藤　初雄、町頭　隆児
９．テレビ局は地域のインタープリター～山梨編～　実施者：川廷　昌弘、萩野　弘樹
10．デザイン教育は参考になるか？　実施者：西村　佳哲

◇10 分プレゼンテーション

＜テーマと発表者＞（以下、敬称略）

・忘れられた図書館　発表者：丸山　高弘
・ＣＳＲワークショップで社員をつなぐ仕掛け　発表者：川路　武
・葛西臨海公園における環境教育プログラム　発表者：宮嶋　隆行
・Ｊ－ＰＯＷＥＲの取り組み～エコ×エネプロジェクト～　発表者：藤木　勇光
・ＮＴＴ東日本の社員意識向上に向けた取り組みについて　発表者：渡辺　裕信

◆ 第３日目

◇この指とまれ！ミーティング

前日のワークショップの続きや課題などを参加者の皆さんから出していただき、「この指とまれ！」方式の具体的な話し合いが持たれました。

＜テーマと実施者＞（以下、敬称略）

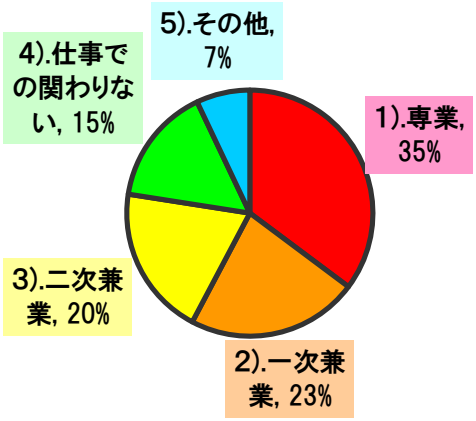
・第３回 つなぐ人フォーラムを考えよう！　実施者：木村　航
・つなぐ勇気　実施者：猪俣　寛
・“演劇でつなぐ”が知りたい！　実施者：河西　あゆみ
・日本、地域のよさを探してみませんか？　実施者：松浦　亜紀
・自然とくらしをつなぐ～パーマカルチャー～　実施者：梅崎　靖志
・つなぐ仕事で月 100 万円稼ぐ方法を考えよう　実施者：新田　隆一、奇二　正彦
・染川さんの秘蔵展示写真大公開　実施者：小笠原 啓一、五月女　賢司、染川　香澄
・「企業」に●●してもらいたい&「企業」で●●したい！　実施者：大島　伸一
・「自然と人を癒しでつなぐ」を考えましょう！　実施者：藤井　亜希子、小林　毅
・日本的自然観を次世代に伝える企画　実施者：山田　俊行
・清里の森を歩きましょう　実施者：田中　宏樹、川村　悦子、斉藤　麻里子

参加者の情報

第２回　つなぐ人フォーラムに参加した皆さんに聞きました。
※第１日目　お互いを知り合う時間に行った「旗揚げアンケート」の結果より

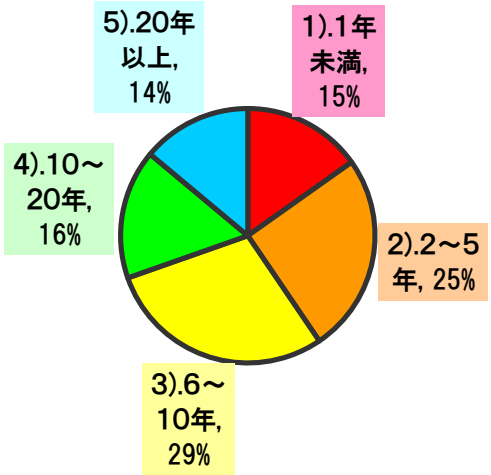
１）「つなぐ仕事」の兼業度調査
（いずれか１つを選択）

1	専業	25 人
2	一次兼業	16 人
3	二次兼業	14 人
4	仕事での関わりない	11 人
5	その他	5 人



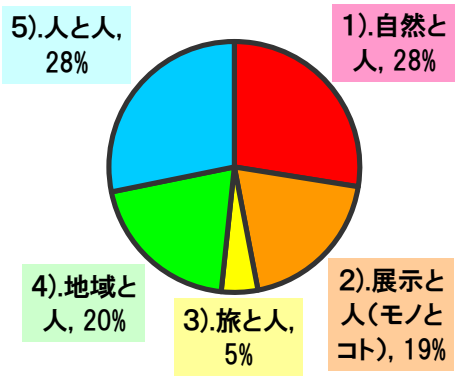
２）「つなぐ仕事」の関わり年数
（いずれか１つを選択）

1	１年未満	12 人
2	２～５年	20 人
3	６～１０年	23 人
4	１０～２０年	13 人
5	２０年以上	11 人



３）分野調査（何と人をつなぐ？）
（複数回答あり）

1	自然と人	41 人
2	展示と人（モノとコト）	29 人
3	旅と人	7 人
4	地域と人	30 人
5	人と人	42 人



実行委員からのメッセージ

学びとは、バラバラなことがつながる快感

つなぐ人フォーラム実行委員会
実行委員　　林 浩二
（千葉県立中央博物館）

「つなぐ」ということの中に、１人のアタマの中でバラバラになっている知識や記憶・考えをつなぐということを考えたいと思います。ふつう、「つなぐ」ということを考える時には、ヒトとヒト（時代や空間を超える場合を含む）や、ヒトとモノ、ヒトと何か、組織と組織などをつなぐことが想定されるでしょう。しかし、つなぐことは１人のアタマの中にこそ必要と思うのです。

こういうことを考えるきっかけは、このところ、小学校や中学校、高校の教員の方々と、子どもの学びについて話をしていることにあります。今の日本の学校では、子どもたちは次から次へと脈絡もなくバラバラな知識を詰め込まれ、暗記させられ、一方で計算の技術やワザの修得を課せられているように思います。特に小学校の高学年、中学校、高校となるにつれ、その度合いが激しいでしょう。

そうであれば、本当の意味での学びに気づく機会こそが貴重ではないか。バラバラなことがアタマの中で意味のあるものとして整理される、腑に落ちる、わかった、意味が形成された、と自ら実感できる経験を積むことが重要であり、そういう、断片的な知識がつながることは、実はとても気持ちの良いことのはずです。ほかの誰かから強制されたのではなく、自分の力で学びの快感を得たときに初めて、その人の中に学びが意義あるものとして、文化として、根付くのでしょう。

ここで述べていることは、学びを学習者の立場で考えることにもつながります。教える側が何を教えたかではなく、学習者が何を身につけられたのかを問わねばなりません。自分のアタマの中で物事が整理できるようになれば、受け身で情報や知識を受信するだけではなく、周囲の様々な事象や情報を積極的に関連付けてとらえ、自ら加工し、発信することも期待できるでしょう。

さらに話をすすめれば、教える側（仕掛ける側）にとっての手応え・やりがいの１つとして、学習者の中のバラバラを「つなぐ」ことができた、という実感があるかもしれないとも考えます。多くの教員は、できることなら子どものアタマの中でつながってほしい、つなげたいのに、それができず、逆につながらないとわかっていながらも、断片配りをこなさなければならず、無力感を覚えているのでは、と推察します。持続可能な開発のための教育(ESD)も、「つなぐ」ことのできる方なら容易にわかるでしょうが、「つなぐ」力をもっていない方にとっては、詰め込まれるべきもう一つの断片でしかないかもしれません。

わたしがこんな思いを実行委員会の場やメーリングリストで発言したところ、実行委員会メンバーの皆さんが受け止めて下さり、やりとりした結果できあがったコピーが、「学びとは、バラバラなことがつながる快感」というものです。これをテーマにしたワークショップの実施には至りませんでしたが、今回の実行委員会が創造の場所＝ワークショップとして見事に機能したことを記録するとともに、メンバーの皆さんに感謝します。

第３回 つなぐ人フォーラムに向けて

Proceeding to the 3rd *Tsunagu-Hito* Forum in 2010

つなぐ人フォーラム実行委員会
Tsunagu-Hito Forum Executive Committee
事務局長　　川嶋 直
Tadashi Kawashima, Secretary General

●さらなるつながりを　ひろがりを

自然の中、博物館や動物園などの施設の中、エコツアーの現場、地域つくりの現場、この４つの「場」が、第１回つなぐ人フォーラムの発案者たちの立ち位置だった。その後第２回のつなぐ人フォーラムでは、広告など社会コミュニケーションの現場や、食の現場も加わってきた。第３回に向けて、さらに福祉や海外とのつながりも視野に入ってきた。

第３回のつなぐ人フォーラムが、さらに、つながり、ひろがってゆくことを期待している。

●隠している場合じゃない

「隠している場合じゃない」という合言葉は、私たちが様々なネットワークを作ってゆくその機会に、そして様々な協働の機会に言い続けていることだ。私たちは「一緒に仕事をする」時点で、共通の未来を願い見ている。その願いを達成するためには、お互いの「知恵や経験やノウハウ」をオープンにして、全体が向上することが必要だ。長いこと苦労して培った「知恵や経験やノウハウ」かもしれないけど、この広場（フォーラム）では、オープンに皆でシェアし、全体が成長するんだという風土を続けて行きたいと強く願っている。

来年のフォーラムが待ち遠しい。

●第３回　つなぐ人フォーラムの開催予定

日程： 2010年9月26日（日）～28日（火）
会場：財団法人キープ協会清泉寮

●Further Connection and Expanse

The standing positions of the 1st *Tsunagu-Hito* Forum's proponents were from 4 sites: nature, facilities such as museums and zoos, ecotourism, and community development.　Then colleagues from social communication fields, such as advertising agencies, and from food and agriculture education joined to the 2nd Forum this year.　For the next Forum, new connections with colleagues from social welfare field and other countries come in sight.　We are expecting to see further connection and expanse in the 3rd *Tsunagu-Hito* Forum.

●No Time for Hiding!

"No time for hiding!" has been a catchword for us in every opportunity for making various networks and working in collaboration.　We always have shared vision for the future at the point we work together.　It is necessary for us to open each other's wisdom, experiences, and know-how for improving as a whole to achieve our common mission.　We wish eagerly to see this Forum as an open opportunity to share what we have for our growth to achieve our common mission, although our experiences and know-how have been built up through hardships for a long time.　We are long for the next Forum in 2010.

●The 3rd *Tsunagu-Hito* Forum

Date: Sunday, September 26 – Tuesday, September 28, 2010
Place: KEEP Seisenryo (Kiyosato, Yamanashi

第２回 つなぐ人フォーラム　実行委員と運営スタッフ

●実行委員長

★小林　毅（日本インタープリテーション協会　／岐阜県立森林文化アカデミー）

●実行委員（アイウエオ順、★は当日の出席者）

阿部　治（立教大学社会学部、NPO「持続可能な開発のための教育の 10 年」推進会議（ESD-J））

海野　義明（オーシャンファミリー海洋自然体験センター／海に学ぶ体験活動協議会）

★川廷　昌弘（株式会社博報堂ＤＹメディアパートナーズ環境コミュニケーション部／日本写真家協会会員）

★嵯峨　創平（IDEC 環境文化のための対話研究所／ミュージアム・シアター・ワークショップ）

★佐藤　初雄（NPO 法人国際自然大学校／CONE（自然体験活動協議会））

★重盛　恭一（まち研究所／ミュージアム　エデュケーション　センター）

★染川　香澄（ハンズ・オン プランニング／ミュージアム・アドバイザー）

★高橋　真理子（山梨県立科学館）

★中西　紹一（有限会社プラス・サーキュレーション・ジャパン／立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科）

★西村　佳哲（リビングワールド／全国教育系ワークショップフォーラム）

林　浩二（千葉県立中央博物館）

★菱川　貞義（275 研究所／ジアスニュース編集局）

★広瀬　敏通（NPO 法人日本エコツーリズムセンター／ホールアース自然学校）

★古瀬　浩史（自然教育研究センター）

●事務局長

★川嶋　直（財団法人キープ協会／立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科）

●事務局（アイウエオ順）

石川　昌稔（財団法人キープ協会）

梅崎　靖志（風と土の自然学校）

遠藤　修作（財団法人キープ協会）

田井中　慎（株式会社４ＣＹＣＬＥ）

増田　由香子（フリーランス）

山本　真知子（財団法人キープ協会）

●ボランティアスタッフ（アイウエオ順）

大智　友弘（立教大学 大学院生）

小野　麗佳（フリーランス）

李　　厚槿（立教大学 大学院生）

藤川　千里（立教大学 大学院生）

山口　織枝（立教大学 大学院生）

●ゲスト スピーカー　(Guest speaker)

Zeng Hongying (China)
(Deputy Director, Center for Environmental Education and Communication, Ministry of Environmental Protection of P. R. China)

Byung Joon Jung (Korea)
(Chairman & Secretary General, Korea Environmental Education Network)

Feri Prihantoro (Indonesia)
(Program Manager, BINTARI Foundation)

Bernadette D. Joeman (Malaysia)
(Manager, Rainforest Discovery Centre, Sabah Forestry Department)

Ju Chou (Taiwan)
(Professor, Graduate Institute of Environmental Education, National Taiwan Normal University)

Hui-Nien Sylvia Lin (Taiwan)
(Assistant Professor, Department of Leisure Management, I-Shou University)

●アテンド・通訳（アイウエオ順）

安　　恩鏡（東京学芸大学大学院）

鈴木　サヤカ（株式会社コーエイ総合研究所）

長安　美恵（国際航業株式会社　国際協力事業部）

萩原　豪（鹿児島大学）

八田　麻理子（ながぐつ工房）

渡辺　京子（会議通訳者）

『第２回 つなぐ人フォーラム
～自然・文化・地域・人をつなぐ～ 実施報告書』
２００９年１２月 発行
編著・発行／第２回 つなぐ人フォーラム 実行委員会
財団法人 キープ協会
財団法人キープ協会（開催事務局）
〒407-0301　山梨県北杜市高根町清里 3545
Tel.0551-48-3795
発行人／実行委員長　小林 毅
翻訳／増田 由香子
編集・レイアウト／梅崎 靖志
印刷／（有）横山印刷
Ⓒ２００９・The 2nd *Tsunagu-Hito* Forum